

---

# 飛べない神様

大和伊織

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

飛べない神様

### 【Nコード】

N0965N

### 【作者名】

大和伊織

### 【あらすじ】

ごく普通に小学生最後の夏休みを楽しんでいた結だったが、目が覚めるとなぜか一面銀世界に放り出されていた。

## はじまりは銀世界

ずぼ、ずぼつと間拔けな音が、ただ耳に届く。

歩くというよりは埋もれながら、結は雪の中をただひたすら歩いていった。吹雪いていないだけマシだが、そのようなことに感謝する余裕などなかった。どこまでも吹き付ける冷たい風はノースリーブに短パンという姿に容赦ない寒波を攻撃し続け、体力を奪っていた。

歩き続けなければ死ぬ、そんな本能にも似た、やる気かもよく分からない衝動だけが結を動かしていた。

一体どのくらい歩いただろう。そしてあとどれくらい歩けばいいのだろう。

それを考えてしまった瞬間、とうとう足が止まってしまった。もう一步も歩けない。このまま死んでしまうのか、なんとなく見上げた空は、どこまでも曇り、幻想的にちらほらとただ雪を降らしていた。

悲しくはない。死を悲しむのは何か心残りがある人間だ。自分は毎日好きなように寝て、好きなように食べて、好きなように遊んできた。そして好きなだけ愛された。

そこまで考えて、自分が死んだら泣いてくれそうな唯一の肉親を思い出した。自分が死んだら確実に泣いてくれるだろうその人をなだめる周りのことを考えると、すごい勢いで同情した。同時に、愛しさが溢れ出した。

「パパ」

会いたいよ、我慢した涙がとうとう流れてきた。同時に、固まっていた足が動き出した。チャンスだとばかりに、結は再び、ずぼず

ぼと歩き始めた。

無心に歩いていく中、ふとまばたきされると、地面が近くなっていた。また雪が深くなったのか、嫌そうに足元を確認すると、叫びそうになった。近づいてるのは自分、倒れてしまう寸前だったらしい。

弱々しく周囲を見渡すと、前も後ろも右も左も真っ白で、どのくらい歩いているのか、どこへ続いているのか分らない。

もう嫌だ、結が意識を手放そうとしてしまったそのときだった。

人の声だ。

現金にも脳が覚醒した。思わず緩んだ表情で結が足を早めると、思わず歓喜で叫びそうになった。空耳ではなかった。

「あのお！」

よかった助かった、結が必死に声を絞り出すと、振り返った男たちを見て、寒さ以外の理由で固まってしまった。

それはゲームかアニメでしか見たことないような、甲冑の騎士だった。甲冑からはみ出す無精髭と着込んだ厚いジャケットがなんだか妙だった。

彼らはこちらに気づくなり、いきなり槍を突き出してきた。思わず結は両手を挙げた。

「何者だ！」

「このような山にそのような軽装で…ここは神聖なる山だぞ！」

「お前、どこの国の者だ！その肌の色、ここの人間ではないだろう！」

責め立てられ続け、どこから返事していいのか、男たちの迫力に結は戸惑ってしまった。確かに言うことがいちいちもつとだ。こんな雪山でこんな格好をした子供が歩き回っていたのでは確かに不

審だろう。

どこからどうやって説明したものの、焦りながらも体は律儀に寒さに震えた。このままでは、風邪ではすまない。

「あ、あの…！話すとややこしいので、とりあえずかくまってもられませんか！？」

「何！？」

「見ての通り子供です！一人です！ここがどこかも分かりません！死にそうです！寒いんです！助けて下さい！」

もはやヤケで現状をぶちまけると、一瞬の静寂の後、男たちの馬鹿笑いがそこらに響き渡った。

「ではどうやってここまで上ってきたというのだ！」

「子供が一人で…さては敵国のスパイか！？」

ああもうそうさその通りさ、男たちの台詞がまたもつともで、結は先ほどとは違う理由でまた泣きたくなってきた。

「怪しい奴め…引つ捕らえよ！」

「ああ！」

「はっ」

捕まえられてしまうのか、思わず結は逃げようとしたが、そうだ、と思いついた。こんなところでうろついているより、彼らに捕まってしまう方が、とりあえずは助かりそうだ。

結が怖がるふりをしながら内心ほっとしていると、奥の男がいやらしく笑って、顔を覗き込んできた。

「おい、こいつ女だぜ。しかも可愛いじゃねえか」

「ちよつと小さいが、高値で売れるかもな」

売られる…

冗談じゃない、思わず走りだそうとした結の腕を、男たちが慌てて掴んだ。

「おい逃げるぞ！」

「取り逃がすな！籠持ってこい！」

「籠！？」

私はカブトムシか、必死に暴れるが、体力の損失と凍えと圧倒的な体格差で、全て無意味に終わった。このままでは本当に売られてしまう、結が父親の名前を泣き叫ぼうとしたそのときだった。

「わん！！」

現れたのは、父親でも、まさか白馬の王子様でもなかった。

まあ、なんというか犬だった。どこからどう見ても犬だった。黒一色で大きな犬は、尻尾を勇ましく振りながら、こちらに近づいてきた。

呆氣にとられた結の頭上で、男たちがまた馬鹿笑いした。

「おい、見る！お犬様が助けにきてくれたぞ！」

「お前の犬か？」

「いや…知らないです」

思わず正直に告白した。あいにく犬は飼ってないし、もちろん知り合いもない。ふと金属音に振り返ると、男の一人が槍を構えていた。

「そーい最近犬鍋、食べてねえなあ」

こいつらの脳内には食べることと売ることしかないのか、呆れてしまった結が、犬に向かって声を張り上げた。

「逃げて！」

助けにきてくれたかどうかも定かではないが、目の前で動物が殺されるのは気持ちのいいものではない。

すると犬は逃げるどころか、こちらに突進してきたかと思えば、あっという間に結の足の間に入り込んだ。要するに、乗せたのだ。

「は」

状況についていけず我ながら間抜けな声を漏らすと、犬はそのまま駆けだした。

「わ、わっ！」

「おい、犬とガキが逃げたぞ！」

「捕まえる！！」

男たちが追いかけていくが、犬の足は風のように速く、結は振り落とされないように必死で犬の尻尾に捕まった。

痛くないかと思わず犬を心配したか、彼（多分）はどんどん駆けていくため、結はありがたくも捕まったままにしていた。

そうしてしばらく走ると、崖っぷちだった。まさかと思ったが、

犬はためらいもなく飛び降りた。結を乗せたまま。

声なき声で叫び、結はとうとう意識を投げ出した。

## はじまりは銀世界・2

人生の中で一番多く言われた台詞を上げてみると言われれば。

「結ちゃんって、変わってるね」

まず間違いなくこの台詞だろう。新学年に上がり新しい同級生が増える度にそう言われた。

気がついたら父しかいなかった。兄弟も祖父も祖母もおらず、父と二人だけだった。父の作るご飯は給食の100倍美味しかったし、寝る前の父の話は教科書よりずっと面白くて、これ以上の家族の必要性など感じたことがなかった。そんな父という時間を割いてまで同級生と遊ぶ必要性も、もちろんだ。人形遊びや鬼ごっこ、ままごと電車ごっこ、あらゆる遊びが楽しいとは思えなかった。

しかし現実はその甘くなかった。通信簿である。どんなに勉強が出来てもどれだけ足が速くても、友達がいなければ容赦なく、いかにも親が心配しそうな文章を書き立て、更に酷くなると家庭訪問まで来る。

0点取ろうが100点取ろうが基本的に反応が変わらない父も、さすがに目の前で担任女性が泣き出したときには慌てていた。

友達が必要だ、父が恥ずかしがらない為に。こう学んでしまった自分は、やっぱり可愛くないし、変わっているのだろう。

それからというのも不思議な話だが、友達は一人、また一人と増えた。子供の遊びも慣れてしまえば楽しかったし、子供の話も聞いてみれば意外と面白かった。始めて友達を泊まりに來させたとき、父の笑顔を見たとき、大きな仕事をやり遂げた気がして、私はたまたま嬉しかった。

小学六年生になった。周りがどんどん大人っぽくなるのに対し、



自分は著しく成長が遅れているらしく、先日など四年生の輪の中に入れられそうになった。久々に、らしくもなく落ち込んだ。

そんな私を見て友人は気を使ってくれたのか、プールに連れてきてくれた。好きなだけ泳いで、並んでアイスを食べながら帰った。

ふいに、友達が遠くなった。

呼んでも叫んでも友達は止まらなかった。周りの人たちもどんどん先を行っていった。止まっているのは、私の方だった。

そして次にまばたきすると、一面銀世界だった。最初は何かの夢だと思ったが、凍てつく風と足元の雪の冷たさが、どうしようもないくらい現実だった。

寒い。寒いよ。

パパ、パパはどこ。

パパ、助けて……

「い……おい、大丈夫か？」

耳元で声がして、結はゆっくりと目を覚ました。最初に映ったのは白一色で、まだ雪山にいるのかと再び目を閉じたくなったが、体を包む温もりと空気の暖かさが、違うと言ってくれているようだった。

しっかりと目を開けてみると、低い天井と、畳の匂いと、一面銀世界の美しい庭が迎えてくれた。古いが丁寧に手入れされてある屋敷の中のようなだった。

雪山で歩き回っていたはずの自分がどうしてここにいるのか、そういうば騎士の男たちに捕まりかけたような、そして何かに助けられたような……

- わんつ！

威勢のいい鳴き声が聞こえた気がして、結は完全に目を覚ました。何があったか思い出せた。そうだ、自分は犬に助けられたのだった。そして犬と崖から飛び降りた。

あちこち体が痛むから天国のわけないし、まさか犬小屋でもない、この屋敷の綺麗さからあの騎士たちの住処でもないだろう。あの男たちが住処をこんなに綺麗にできるとはとても思えない。なら、一体ここはどこだろう。

結がゆっくりと顔を上げると、枕元で正座していた青年が微笑んだ。二十歳前後のいかにも人の良さそうな青年は、肩までの髪も優しい目も、着ている浴衣も全て美しい漆黒だった。

見覚えのない顔、が、少なくともあの騎士たちよりは信用できた。

「おはよう。どこか痛いところはないか？」

「…全部」

思わず正直に告白すると、男は思いきり笑ってくれた。

「そうか、全部か。そうかそうか。まあ、とりあえず生きてくれてよかった。全然起きないから、もう駄目かと思った。とりあえずたくさん寝たから、後はたくさん食べて、傷を綺麗にしないと。飯は今作らせてある。嫌いなものはあるか？」

「ピーマン…」

は、最近攻略したが、どうもまだパプリカは苦手だ。前言撤回すべきかどうか迷っていると、青年は首をかしげた。

「聞いたことがないな…異国の料理か？まあ、とりあえず、そんな食べ物が入ってないぞ。聞いたことがないからな。よし、とりあえず体を拭くぞ」

そう言う男が、よいしょと結を起き上がらせた。

「はい、ばんざい」

まるで幼子をあやすように青年が結のタンクトップをずりりと脱がせた。いくらか成長した胸が露わになり、思わず結は、あ、と呟いた。

少女のように叫んだのは、青年の方だった。

隅で小さくなり虫のように動かないので、結は思わず声をかけた。

「…あの、お気になさらず…私、まだ子供ですし…」

「…っ、いや、大変なことをしてしまった…まだ婿入り前なのに…！」

震える男の背中を見て、結はため息をついてしまった。どちらが男が分かったものではない。結がもう一度何か声をかけようとする、男はいきなり回復したのか、こちらにやってきた。

「性別を確認せず、いきなり肌を見たことをまず詫びる。しかし俺はまだ未熟者だ、嫁はまだ取れない」

「いやいやいや」

どこから突っ込めばいいのか、ぱたぱた手を横に振っていると、盛大にくしゃみが出た。するとまた男は慌てて立ち上がった。

「ああ風邪を引いてしまうな…おい！着物！女物の着物だ！それから飯はまだか！？」

叫びながら男が出ていってしまい、結はまたため息をついた。忙しい人だ。

そういえば、名前も聞いていない。あの犬の主人だろうか。というか、そもそもここはどこだろう。もつといえ、今自分がいる”ここ”は日本なのか、地球なのか。

そんな壮大なことを心配しながら、律儀に腹の虫だけは鳴り続けていた。



### はじまりは銀世界・3

それから間もなく、食事が運ばれてきた。運んできた女たちは見た目も年齢も様々だったが、共通していることは全て薄紅色の着物を着ていること。すれ違う青年にいちいち満面の笑みを浮かべること。そして自分を睨みつけること。

どうも彼女たちは全員、青年に気があるらしい。更に自分の存在が面白くないらしい。実に分かりやすい面々である。

運ばれてきた料理は見たことがないものばかりだったらどうしようかと思ったら、大盛りのお粥と山菜の漬け物だった。舌が和食に慣れている結は喜んでかきこんだ。

あまりの空腹であつという間に平らげると、青年が笑いながら戻ってきた。先ほどの女たちは一人もおらず、少しほつとした。

「それだけ食欲があれば十分だな。すぐに歩けるようになるだろう」

はて、骨折でもしたんだろうか、そつと自分の足を見ると、これでもかと包帯が巻かれ、今更ながら感じたことがない痛みが疼いた。「骨まではやられなかったみたいだが、酷い凍傷だ。おまけに切り傷もすごいぞ。熱も大分下がったが、まだ平熱じゃないしな」

「…あの…」

なかなか覚醒しない脳、異常に減った腹、それは以前20時間昼寝したときの症状に似ていた。

「一体どれくらい寝ていたんですか？」

「ん？3日だ」

「3日！」

父を始めとした友人や先生たちの顔が忙しく脳を駆け巡るが、携帯が通じないことはとうに分かっていたし、更にこの足ではどうし

ようもならないと、ゆつくりと諦めていった。

そして、3日もお世話になったことに今頃気づいた。

「ええと…どうもありがとうございます」

自分の出来る限りで精一杯頭を下げると、向かいの青年も慌てるように頭を下げた。

「ああ、いいんだ。気にするな」

「わん！」

ふとまた耳の奥から犬の声が聞こえて、もう一人の恩人を思い出した。

「あの…あの、真っ黒い犬は」

「え？」

「私を助けてくれた真っ黒い犬は…どこですか？あなたの犬ですか？」

「ああ。それは俺だ」

「は？」

話に全然ついていけない結が呆けていると、どれ、と青年が立ち上がり、いきなりバク宙をした。すると、青年が大きな犬になってしまった。思わず反射的に拍手をすると、犬が、わん、と大きく鳴いた。

「さて」

犬の口から青年の声が聞こえてきた。こういっては悪いが、なんだか間抜けだ。

「ずっと君と話したかったんだ。何から聞きたい」

「…ええと。それは、また、人に戻れるんですか？」

犬がきよとした顔を見ると、器用にバク宙をした。するとまた青年になった。思わずまた拍手すると、彼は照れたように笑った。

まだあちこち痛いので横になりながら青年の話を聞き始めた。彼はずつとどこか痛くないか、眠くないか、腹は減ってないかと連呼していて、信じてもらうまでずいぶん時間がかかった。絵に描いたようないい人だ。

「俺の名前は九郎。冬の里の者だ」

「冬の里…？」

「ああ。この世界、世界っていうのも変な話だがな、春の里、夏の里、秋の里、冬の里と分かれているんだ。お前が今いるのは冬の里。ずつと冬なんだ。君がいた日本とは違ってな」

「日本を知っているんですか？」

「知っているも何も、日本に季節を提供しているのは俺たちなんだぞ」

「へえ」

素直に感動し、素直に信じ込んだ。男の人柄が溢れるような声と話し方は、まるで父の昔話のように心地よく吸収されていた。

「私は…夏から来ました」

「はは、通りで…涼しい格好だったわけだ。災難だったな。山で会った連中を許してやってくれ。最近、色んなことがありすぎてな。色々みんな力り力りしてるんだ」

「それは大丈夫です。あの」

「ん？」

「帰れるんでしょうか、私」

ずつと迷っていたが一番聞かなくてはいけない問題、否定されることはわかりきっていたのに。彼なら一秒でも早く、家に帰そうとしてくれただろうから。

しばらく黙った後、九郎は首を横に振った。

「すまない、分からないんだ。君のような旅人の話は聞いたことがない」

「…そう、ですか」

きつと落ち込んでしまったのだろう、慌てたように九郎が笑ってくれた。

「けど、心配するな…いや、心配するなは言い過ぎか。帰すことを約束できないが、俺は、まあまあ偉いんだ。権力も財力も人手もある。いくらでも調べてやるからな。だから、だから泣くなよ」

「……………はい」

思わずそう返事をする、また九郎が笑ってくれた。

「よかった。そうだ、名前は。君をなんて呼んだらいい」

「結です」

「…美味そうな名前だな」

久々に言われた。軽く落ち込んだ結は、ふと、九郎の言葉と、庭の広さ、先ほどの女たちの多さに違和感を覚えた。一体この人はどれくらい偉いんだろう。

「あの…ご職業は」

なんだかお見合いみたいだ、質問すると九郎はちよつと嫌そうに、静かな声で言った。

「王子」

まあまあ何も、ものすごく偉いんじゃないか。

自分は一体運がいいのか悪いのか、思わず頭を下げた結の向かいでまた九郎が頭を下げて、頭をぶつけ合ってしまった。



## はじまりは銀世界・4

九郎の屋敷に世話になって更に数日、結の体力はすっかり戻った。起き上がるのはもちろん、なんとか歩けるほどに回復した。

それを告げると九郎は散歩に連れていってくれた。手を引かれることは正直恥ずかしかったが、雪があまりに深い為、素直に甘えることにした。

九郎が歩くと、人々がみんな頭を下げた。いちいち頭を下げ返したり、手を振ったりしているのが印象的だった。

彼は毎日どこかに出かけては、夜になると帰ってきた。そして必ず、自分の手を引いて歩いては、美味しいお店に連れて行ってくれた。

最初に目を覚ました日以来、女たちは屋敷には来ない。広い屋敷に自分と九郎だけ。

すっかり歩け回れるほどに回復したある朝、あまりの洗濯物の多さと、台所の汚さに驚いた。勝手に片付けていいかどうかずいぶん迷ったが、一度見つけてしまったため、気がつけば皿を手にとっていた。

「やるか」

洗剤もない食器洗いは難航したが、なんとか綺麗に片付いた。今度は洗濯だ。文字通り山のような洗濯物を次から次に掘っていく。洗濯機は見あたらないし、まさかコインランドリーがあるとも思えない。一体どうやって洗濯すればいいんだろう。

いくらか洗濯物を掘っていくと、大きな洗面器と洗濯板が顔を出した。

「…嘘お」

「ただいま」

「お帰りなさい」

あー疲れた、と上着を結に渡した九郎は、鼻をくんくんと動かした。

「なんかいい匂いがする」

「あ…夕飯を作ってみました」

「え!？」

大げさに驚いた九郎が、慌てたように台所へ走っていった。そして次に洗面所へ走っていき、忙しく走り回り、ようやくこちらへ戻ってきた。

「飯が出来てる!」

「はい」

「洗濯物が片付いてる!」

「はい」

やっぱり迷惑だっただろうか、九郎の顔を見上げると、彼は見たことがない顔をしていた。その驚いているような、喜んでいるような、悲しんでいるような。結がなんて声をかけていいか迷っていると、九郎の額が肩に乗ってきた。

「…り、がとう。ありがとう」

「…いいえ」

よかった喜んでくれた、ほっと笑った結の向かいで、顔を上げた九郎も笑ってくれていた。

「食べよう」

「はい」

「おかわり」

「はいはい」

返事も雑になってきた、よく食べるなあ、と笑いも出てしまった。

いつも食事処へ行つてはたくさん食べてはいるが、今日は特によく食べている。自分が作ったから気を利かせているかとも思ったが、こつもたくさん食べてくれては、そんな考えもどこかへ行つてしまつた。

綺麗に味噌汁を飲み終えた九郎が、両手を合わせた。

「ごちそうさまでした」

「いいえ」

お茶を淹れると、九郎は何度目か分からないお礼を言つてくれた。

「全然王子らしくなくてびっくりしてるだろう」

「…少し」

「だよな。俺もそう思う。俺、駄目だったんだ。城で、たくさんの人に囲まれて、朝から晩まで人がやつてくれるの。耐えられなかったんだ。だから、飛び出した」

そこまで一気にしゃべると、九郎が少し照れたように頭をかいた。「城に残つてたら、結にもつといいところで寝かせてやつたんだがな」

「そんな、十分です」

日本ではベッドだったが、敷き布団も慣れてしまえば毎晩快適に熟睡していた。ホットカーペットもヒーターもないが、何枚も重ねた布団と七輪で、十分暖かい。

「そうか、ならいいけど…あ、そうだ。弁当は作れるか？」

「はい、大丈夫ですけど」

「よかった。じゃあ明日頼めるか？城の奴らにお前のこと話したらさ、愛妻弁当作ってもらえって言われたんだ」

お茶を、吹き飛ばすかと思つた。

「なんか知らんが美味そうだ。大丈夫か？」

「…頑張ります」

多分この人は、城ですごいからかわれているのだろうと、あまりの気の毒だったが、教えてやらない自分もまた大概だ。

「…はい、お弁当です」

「お、ありがとう！」

いそいそと嬉しそうに弁当を包む彼を見て、かなり良心が痛んだが、今更弁当の中身はどうしようもなかった。

この世界の食材は日本と似ていることは助かったが、あいにく自分のはあの定番のハート柄の正体が何か分からなかったため、鮭をつぶしてハートにまぶしてみた。おかずもできる限り可愛くしてみた。一体自分は何をしているのか、ともあれ、彼が望むなら、なんでもしてやる気にはなっていた。彼には感謝してもしきれない。

「じゃあ、いつてくる」

「はい、いつてらっしゃい」

それでも少しやりすぎたかな、ごめんなさい、と背中に向かって礼をすると、ふと彼が思い出したように帰ってきた。

「そうだ。今日は絶対に家から出るなよ」

「…？はい、分かりました」

疑問に感じながらも結が言われた通りに頷くと、九郎はにっと笑い、髪をくしゃくしゃに撫で、元気に飛び出していった。

今日も寒いがいい天気だ、家中の窓を開け、結は大きく伸びをした。洗い物を片付け、洗濯物を干していく。毎日雨のように振る雪の機嫌を伺いながら、干していく。ふと洗濯物の一枚が風に飛んでしまい、庭を出て、道へ出ていつてしまった。

慌てた結が服を追っていくと、当然家から出た。

ふと九郎との約束を思い出し、思わず辺りを見渡すと、隣のおじいさんが挨拶してくれて、ほっと笑った。何事もなく、家の中へ戻るうとしたそのときだった。

ふいに目の前が何か大きなものにふさがれた。それが槍だと分か

るまで、ずいぶん時間がかかった。

「止まれ！」

「何者だ！！！」

振り返ると、やはりというか何というか、甲冑の男たちが立っていた。いつかの雪山の男たちとは声が違ったが、そんなことは問題ではなかった。恐怖がつま先から頭を走り、思わずへたり込むと、男たちが顔を覗き込んできた。

「やはりこの里の者ではないな」

「お前、どこの方だ。どこに住んでいる」

今ここで九郎の名前を出すのは躊躇ったが、それで自分の身に何かあつてはもつと叱られると自惚れられたのは、彼の優しさ故だ。

「九郎様の…屋敷に」

なんとか声を振り絞ってそう答えると、少しの沈黙の後、男たちは大笑いした。

「嘘をつくならもつとマシな嘘をついたらどうだ！」

「あの方がお前のような小娘相手にするものか！どのような美女が訪ねてきても、門前払いだったというのに！」

「それは」

自分は別世界からやってきて彼がたまたま拾ってきてくれたただだと、説明したくても、そんな勇氣はとても出なかった。

それでも何かしゃべろうとすると、鼻先に槍の矛先が向けられた。死の恐怖を感じたのは、雪山以来だった。

「おい、皮を剥げ！」

「はっ……」

「そこまですれば吐くだろう！」

冗談ではない、恐怖で声が出ないため周りを見渡してみるが、唯一の顔見知りのおじいさんはもうどこかへ行ってしまったし、道行

く人たちも同情的な視線を送るだけで、我先にと逃げ出した。

このことだったんだ。九郎が案じてくれていたのはこのことだったんだ。

ごめんなさい、見えない九郎に謝っていると、目から涙が噴き出した。こんな形で彼と別れてしまうことが、死ぬより怖かった。

「九郎様!!」

思わず助けを泣き叫んでしまうと、ふと、新たな槍が現れた。

怪訝そうにその方向を睨み上げた男たちが振り返ると、慌てるように頭を下げた。目に涙を溜めた結がなんとか顔を上げると、あまりの恐怖に涙が止まった。

こんな。

こんな顔の恐ろしい男は見たことがなかった。

## はじまりは銀世界・5

「犬神様：！」

「犬神様！」

犬神と呼ばれるその男が歩く度に人々は頭を下げ、地面にひれ伏す者までいた。九郎のときもこうだったが、雰囲気がまるで違う。頭を下げる人々の表情に親しみはなく、誰も彼も恐怖の表情を浮かべていた。犬神が通り過ぎていくと、皆が屋敷へと逃げるように帰っていった。

怯える兵士たちの前まで犬神が歩いてくると、結を見下ろした。あまりの恐怖に、結はただ彼を見上げることしかできなかった。

年は三十前後くらいだろうか。九郎も長身寄りだったが、彼はもっと高い。恐らく二メートル近くあるだろう。黒く美しい長い髪は後ろで一つにまとめ、黒い着物には鋭利な槍が何本も備えてあった。美しい目鼻立ちが鷹のように鋭い目を余計に目立たせていた。

「何をしている」

まるで地面の底から這い上がってきたような低く威圧感のある声に、兵士たちはまた震え上がったが、一人が勇気を出したように一歩外へ出た。

「身元不明の子供を…発見致しまして。九郎様の屋敷に住んでいるなどと戯れ言を申すものですから」

「九郎君の？」

再び犬神から見下ろされ、結は思わず腰だけで、少しだけ後ろに引いた。尻が冷たいなんてもんじゃないが、そんなこと言ってる場合じゃなかった。立ち上がれもしない。

正直九郎君、と少し親しげな呼び方にほっとしたが、彼が九郎の味方であるとは限らない。第一、九郎が今日家を出るなど言ったのは、この男が里に来るからではないだろうか。兵たちに関しては、九郎は少なくともかばっていた。

「それで？」

「…あの…少し拷問しようかと」

犬神が兵たちを睨み付け、彼らと一緒に結も怯えた。

「確かに里の者ではないようだが、九郎君の知人ではないという保証はない」

「しかし！」

「祭の前で警戒態勢も構わないが、君たちが九郎君の知人を傷つけたとあれば、国が潰しにかかるのは十分な理由だ。彼の立場を忘れたか」

兵たちが言葉に詰まり、頭を下げながら逃げるように消えていった。ひとまず助かったのか、いい加減威圧になれてきた結が立ち上がると、再び犬神と目が合った。

「異人か」

それは異世界から来たということの意味だろう、少し迷ったが結は力強く頷いた。彼に嘘をつくのは得策ではないと思ったからだ。しかし瞬間、後悔した。彼の槍が、自分の首もとまでやってきたからだ。

「城まで来てもらおう」

「く…」

九郎様の呼び声が喉から出かかったそのときだった。

「わんわんわん！！」



場違いな犬の声に、結は思わず表情が緩んだのを自覚した。大きな黒犬はやはり九郎で、こちらへ走ってくるなり、人間の姿に戻り、自分をかばうように強く抱いた。

「犬神さん、待ってくれ！こいつは俺が勝手に拾ったんだ！」

「…君が？」

「詳しいことは後日必ず話す！とりあえず今日は勘弁してやってくれねえか？」

「なぜ、今、話せない」

「こいつ、風邪が治ったばかりなんだ。こんな寒いところにいたら、ぶりかえす」

「九郎君、君は」

「家族、なんだ」

今、九郎はどんな顔をして、こんな言葉を言ってくれたんだろう。顔が見られてなくてよかった。涙が溢れて、止まらないから。

「…そうか、その子が…思ったより若いな。女兵に口説かれても応えなかったのは、そういう趣向があったからか」

「ばっ」

真っ赤になった九郎を見て犬神は鼻で笑うと、そのまま去っていった。そして少し離れたところで、もう一度振り返った。

「明日、城へ連れてきなさい」

「城へ！？冗談じゃない、何する気なんだ！」

「これは、命令だ。俺からではない。誰から分かるな」

ぐ、と九郎が言葉に詰まり、そして犬神は今度こそ本当に去っていった。それを見送ると、九郎はそのまま結を高く抱いて、自宅へと入っていった。

「…あの」

何から詫びていいか分からない結はとりあえず声をかけてみるが、

九郎は答えない。怒っているのだろう、約束を破ったのだ、もう捨てられるかもしれない。

震える結がなんとか顔を上げようとすると、失敗した。抱きしめてくる九郎も、震えていたからだ。

「血の匂いがしない…よかった、無事で」

「…九郎様」

「また、一人になるかと思った」

九郎の顔は見えないが、その震え方は泣いているようだった。父親から言われたことがある。男の涙を見るのは、ルール違反だと。その言葉がなくても、とても九郎の顔を見れたものではなかった。胸元にしがみつくことに忙しかったから。

仕事に戻らなくていいんだろうか、犬神から庇ったことにより彼の立場は危うくならないのだろうか、気になることはいくつもあつたが、どれも聞けなかった。彼が側にいてくれることが、嫌になるくらい心強かったからだ。

その日は、九郎が晩ご飯を作ってくれた。見た目も匂いも酷かったが、驚くことに味は美味しかった。一体何の料理か分からなかったけど。

風呂の後、いいというのに九郎は髪を拭いてくれ、おまけに髪をとかしてくれた。恥ずかしかったが、ここまでくればとことん甘えることにした。

「明日は城に連れていかなきゃいけなくなつた…ごめんな。犬神さんの命令なら何とか逆らえそうなもんだが」

「いいえ、大丈夫です。九郎様と一緒になんでしょう?」

「…？もちろん」

「だったら無敵です」

そういつて結が笑うと、九郎は照れたように頭をかいた。

「いや俺は弱いぞ。犬神さんにだって喧嘩で勝てたことないし…  
今日だって」

そこまで話すと、九郎は耳まで赤くなった。

「…っ、そうだ今日…ま、まあいいやその話は。疲れただろう。  
今日は、一緒に寝ようか」

「はい」

## はじまりは銀世界・6

翌朝、朝一で城へと向かうことになった。城へ行くことに対しての恐怖はあまりなかったが、九郎に上等な着物を着せてもらうと、さすがに緊張してきた。

「いいか、俺から絶対離れるなよ」

「はい」

言われなくても離れられるわけがない。九郎の手をしつかり握り、馬車に揺られ、城へ着いた。そこは予想に反して、シンデレラでも踊っていきそうな洋風の城だった。城に入る前くらいから雪は止み、着込んだ着物が少し暑いくらいだった。

歩く度に、兵士たちの頭が下がる。彼らの顔は皆無機質で、人形のようなだった。そこには親しみも愛情もなく、ただ九郎の肩書きのみに機械的に頭を下げているようだった。九郎がここを出た理由の100分の1くらいは、分かれたような気がした。

赤い絨毯が引かれた長い廊下をいくらか歩いていくと、今までの扉とは比べものにならないくらい立派な金の扉が現れた。以前の九郎の部屋だろうかと思うと、どうも違ったようだ。繋いでいた手を払われ、九郎だけ兵に軽く抑えられた。

「これより先は、姫様だけに願います」

「何!?!」

姫、とは自分のことらしい。兵に食らいつかんばかりに怒った九郎の手を、結が慌てて少し引っぱった。

「大丈夫です、一人で行けます」

扉の向こうに誰がいるのか、何があるのか検討もつかなかったが、結は精一杯嘘をついた。このままでは例え九郎でも痛い目に合わさ

れてしまつかもしれない、と思ったからだ。

「けど」

「大丈夫です」

そう言つて強く言つと、重い扉が兵によつて開けられた。最後に九郎の顔が見えた気がしたが、あまり見ないようにした。甘えてしまいそうだったから。

開かれた扉の向こうは、植物園のようだった。天井から床を囲むように花や草木がところ狭しと並べられ、蝶や鳥まで飛んでいた。暖かく眠気を誘われるような室温の中、テーブルでお茶を飲んでいる老婆がいた。何才か検討もつかないほどの皺の数だったが、きちんと綺麗に身だしなみを整え、薄紅色の浴衣が美しかった。

見渡す限り彼女しかない、結が近くに行つておじぎをすると、老婆が微笑んだ。

「はじめまして。結と申します」

「あんたが…私は冬の里を守つてるもんだ。九郎の曾祖母でもある」

「そうそ…」

「ああ。ひいおばあちゃんつてことだよ」

「ひいおばあちゃん！」

思わずオウム返しに驚いてしまうと、彼女は豪快に笑つてくれた。その笑顔に笑い返し、結はもう一度お辞儀をした。

「九郎様にはいつもお世話に」

「そんな固い挨拶はいいから」

ふと。彼女が皺だらけの手で結の顔を包んでくれた。なぜだか、泣きそうになった。

「あの子はね。かわいそうな子だね。兄弟も、親も、祖父祖母も、全部全部戦争で亡くしてしまった」

戦争。学校の教科書でしか聞いたことがない話だが、急に目の前で九郎の広すぎる屋敷が広がって、妙にリアルになった。全部奪ってしまったのだ。

「私とあの子だけが残った。私はもうこんな年だから、あの子に継いでほしかったんだけどね。まあ、どっちにしても私が死んだらあの子が王だけど」

そうか、それで彼は王子なんだ。少し納得した結の目を見て、女王はまた笑ってくれた。

「いい目をしている。愛されてる目だ。わけの分からない世界に飛ばされて大変だろうが、あの子を愛してやっつくね。あんたが愛されたように、してくれればいい」

「はい」

「いい子だ…さて。あんたの帰る方法だがね」

思わず強く反応した結を、女王は笑って草場へ促した。会釈をして下に腰掛けると、彼女が眼鏡をかけ、大きな巻物を取り出した。

「世界を超えるなんて、すごい力さ。私でも想像できやしない。

でも現にあんたはここにいます。世界を超える。そんなすごい力が働いたんだ。何か理由があるとは思わいかい？私はね、お姫様。あんたがその理由を到達するまで、帰れないんじゃないかと思うんだ」

「理由…ですか」

「世界を超えるものは皆、理由がある。そして理由を見つけて、解決して、帰っていく。その理由が、祭りにあるかもしれない」

「お祭り？」

そういえばどこかで聞いた、女王が満足げに頷くと、また別の巻物を取り出した。

「九郎のこの世界のことは聞いたかね」

「はい」

「重複するかもしれないが、夏秋冬それぞれの里にそれぞれの王がいる。冬は私さ。継ぐのは九郎、そうになると補佐は犬神になるだろうね」

先日の彼は九郎側の人間だったのだと、始めて知れた。しかし名前を言われると思わず震えが出てきたような気がして、ごまかすように会話を探すと、小さな違和感に気づいた。

「春はいらっしゃらないんですか？」

「…行方不明だ。もう十年以上前になるかね」

慌てて謝ろうとすると、女王は両手を振って制した。

「もう何年も前に死んだことになったちまつたが…ところが。あなたの世界には変わらず春が来る。違うかい？」

「ちゃんと春は来てます」

「そうだろう、そうだろう。だからね、どこかで生きてると思うんだ。どこで何してるか知らないがね…だから、この時期になるとね、春の王を探すという名目で騒ぐのさ。春の王は、お祭りが大好きだったからね。去年もおとしも、出てきやしなかったけど」

「そこで…私は何をお手伝いすればいいんですか？」

そういうと女王は目を丸くして、また豪快に笑った。

「さっきの話かい？私にはね、あんたが春の王かもしれないと思っただんだよ」

「…ええ？」

少し遅れて驚くと、女王は手を叩いて笑った。

「そしたら…まだまだ子供じゃないか。九郎より、うんと若い。むしろ、幼いね。あんた、今すぐ帰りたいかい？」

「いいえ」

我ながら感心してしまいそうなお返だった。あの雪山のままだったらそう答えていただろうが、今は違う。九郎がいて、守ってくれている。

その答えに、女王は満足げに頷いて、そしてどっこいしょと言いながら立ち上がった。慌てて立ち上がって杖を支えると、彼女はありがとお、と言ってくれた。

「年寄りの長い話なんて聞き流しとくれ。あるかどうか分かんが、理由は九郎と一緒に探せばいい。九郎と一緒にいてやってお

くれ」

「はい。私でよければ」

また笑ってくれた彼女から握手を求められ、しっかりと握り返した。

ふと、扉の向こうから大きな音がした。大きな騒ぎ声が聞こえて、犬の声まで聞こえてきた。まさかと思つて扉に近づくと、扉を頭で突き開けてきた黒い頭が見えた。もちろん、九郎である。

わんわんわん！！

九郎は犬の姿のまま吠え続け、次にまばたきする頃には、女王めがけて走った。呆氣にとられた結だったが、止めようとしたそのときだった。

しなやかな杖の動きで、九郎はひっくり返らされ、尻餅を盛大に突いたときには、もう人の姿になっていて、涙目だった。結が思わず走って近づくと、軽く抱きしめられた。

「いつてえ…っ、おい、ばばあ！結に妙なこと言つてないだろうな！？」

「誰がばばあだ、まったくいくつになつても落ち着かない…そんなに小さい嫁の方がしつかりしてるじゃないか」

「…！なっ」

姫からとうとう嫁になつてしまった、九郎の顔色を何気なく伺うと、真つ赤になつてしまつていた。

「さあ、帰りな。嫁に風邪を引かせるんじゃないよ」

「言われなくても…」

女王からさよならの代わりにウインクをもらい、会釈さえする暇もなく、また犬になつた九郎に、あつという間に外へ連れて行かれてしまった。



犬の姿のまま、九郎は結を乗せたまま、黙々と歩いていく。何か声をかけようと思ったが、今は止めた方がよさそうだった。

廊下をそのまま進んでいくと、兵がぎよつとこちらを振り返ったが、それだけで何事もなかったかのように会釈してすれ違っていた。するとさすがに人間の姿に戻った九郎が、結の手を引いてまた黙々と歩き始めた。少し痛い。

「…あの」

「…」

「怒つてもいいから、何かしゃべってください」

自分は九郎の声が好きで、安心するのだ。思わずそう願ってしまった。うと、九郎はまた赤くなっていた。そしてそのまま、結の両肩を掴んだ。

「お前なあ！ひいばあちゃんに嫁つて言われても否定しないわ、愛妻弁当は作るわ…っ、そうだ、弁当だ！あれ嫁さんが作る弁当だったんだよ！」

「……………はい。」

「知つてたな、その反応は！教えるよ！」

照れたり怒ったりする九郎がおかしくて思わず笑ってしまうと、九郎がため息と一緒に顔を下げた。

「九郎様が望んでくれるのなら、何でも作ります。何にでもなります」

「だからって…嫁は否定しろよ」

「しませんよ」

顔を上げた九郎は、少し驚いた顔をしていた。なんだかよく分からない照れがこみ上げてきたが、言葉は止まらなかった。

「九郎様が嫌なら、次からは否定します」

「嫌なわけないから、困ってるんだろっ」

「じゃあ、否定しません」

「…でも結婚はもう少しでかくなってから考える。俺よりいい男

は五万といるぞ」

「…そう、ですか？」

曖昧に、どころか疑問系の返事になってしまった。父親と結婚できないのは何年も前に諦めたとして、九郎よりいい男なんて、想像もつかない。

## はじまりは銀世界・7

九郎に手を繋がれ長い廊下を歩いていくと、後ろから彼を呼ぶ声がした。少し面倒臭そうな顔をしたが、結の手を離し、目線を合わせるようにかんだ。

「そこを右に曲がったら黄色い扉がある。その中に入ってる。すぐ帰ってくるから、絶対に出るんじゃないぞ」

「分かりました」

仕事の邪魔にならないように、結は頷いて素早く言われた通りの場所についた。黄色い扉を一応ノックすると返事はなく、失礼します、と入った。

「……」

「……」

「……」

中には多数の先客がいた。埋め尽くされるように犬、犬、また犬。どれも真っ黒で、どれも犬になった九郎に似ていた。なんというか圧巻だった。失礼だが非常に獣臭い。

「おい、閉めるよ」

「寒いよ」

犬の口から人の言葉が発せられ、結が慌てて扉を閉めた。すると一番手前の犬が、結をじろりと見るなり、けたたましく吠えた。

「おい、こいつ、異人だぜ！」

「ほんとだ！」

「おい、誰か食ってみろ！」

またこんな展開か。結の脳内で逃げなさい、と警報が鳴るが、この部屋から出るなと約束したのだ。約束はそう何度も破っては意味

がない。

しかしこのまま食べられてもたまらない。九郎に助けを求めるのが一番の得策に思えたが、仕事の邪魔をするわけにはいかない。近づくと犬たちからの恐怖にじっと耐えていると、奥からどけ、と低い声がした。

その声に犬たちが道を開け、奥から、集団の中一回り大きい犬が歩いていった。その鋭い目つきに、結は昨日の恐怖を思い出した。

「…犬神様？」

そう呼ぶと犬は大きく吠え、すると犬たちが全部外へ外へ逃げていつてしまった。狼のように恐ろしい声だ。そして犬神かと思われる犬も、そのまま去っていつてしまった。最後に、首から首輪のようなものを置いて。

恐る恐る拾うと、それは美しい鳥の羽の首輪だった。犬神の大切な物ではないのか、立ち上がって声をかけようとしたそのときだった。

足音が聞こえ、扉が開け放たれた。

「結」

九郎だ、結が思わず笑顔になると、彼は高く抱いて思い切り笑ってくれた。

「よかった無事か…あいつらが城うろろしてるからな。大丈夫だったか？」

「はい、なんとか…そうだ。大きな犬が、これを置いておったんですけど」

これ、と首輪を渡すと、九郎は目を丸くした。

「…大きな犬…そいつが、これをお前にくれたのか？」

「くれたというか…置いていったというか」

「じゃあ、くれたんだ。お前がもらっておけ。俺には必要がない

ものだから」

部屋を出ると、九郎がいきなり、廊下を歩いてみる、と言い出した。九郎の手も九郎自身も離れてしまい、えっと驚いてしまった。すると九郎が先ほどの首輪を首にかけてくれると、軽く背中を押された。

言われた通りに恐る恐る歩いてみると、早速兵にすれ違った。思わずすくむと、なんと兵がお辞儀したのだ。結が呆けていると、次から次へ、すれ違う人がお辞儀していった。

「な。すごいだろ、それ。いいものもらったな」

「…これ…一体、なんなんですか？」

「この里では偉いです、って物だ」

「…！返してきます！」

そういうと、九郎は声を上げて大笑いした。

その日は九郎が疲れただろう、と外食に連れていってくれた。食事処の人たちが、九郎だけではなく、自分にまで頭を下げて笑ってくれて、申し訳ないがそれ以上に嬉しかった。焼き豆腐と炒め物を九郎と食べていると、彼が急に真面目な顔になった。

「祭の話し、ばあちゃんから聞いたか」

「はい」

「それにお前が参加することが提案された。これは、犬神さんの提案だ」

「犬神様の…」

「そうだ。ここはとにかく、よそものを嫌う。お前はそれでたくさん怖い目にあっただろうから、よく分かっていると思う。すぐに殺そうとする、すぐに食べようとする。どうしてか、簡単だ。恐ろしいからだ。異なるものは、どんな力を持っているか分からない」

「そんな」

首を思わず、横に強く振った。

「私は何もできません」

「分かつてる。けど、それを分かつとしない奴の方が多い。こはとにかく雪に囲まれ閉じ込められ、里のみんな全部家族みたいなもんだ。だから異なる者が入ってきたら、警戒する。酷い時は殺してしまう。そこで誰も責めないんだ」

皆。皆が自分や周りを守りたくて必死なんだ。結が頷くと、九郎が酒を勧めてきたが、さすがに笑って断った。

「だから、お前が何も力がない無害な者だと分かれば、里の者が警戒を解く。生活はもちろん、元の世界に戻る方法も探しやすいくなる」

「それを…犬神様が提案してくれたんですか？」

「あの人は顔は怖いけど、本当は女子供に優しいんだ」

九郎がそう言うのなら絶対そうなのだろう、悪いことをしてしまった。ぎゅつと首輪を掴むと、九郎が頭を撫でてくれた。

「私は、何をすればいいんですか？」

「分からない。すまん、本当に分からないんだ。俺はお前の家族だからな。味方には教えられないんだろう。大丈夫。妙なことになるなら、絶対に助けるから」

「はい」

それなら大丈夫だ、ほつとしていると、奥から九郎を呼ぶ大声がした。

「王子様！こっちで飲もうぜ！」

「ああ？いや、でも今日は…」

九郎がこちらをちらりと見たので、結は慌てて立ち上がった。

「大丈夫です、一人で帰れます」

「けど」

「明るい道を通りますし、誰にもついていきません。家も鍵をかけます。外にも出ません。絶対に扉を開けません」

そこまで強く言つと、九郎は苦笑して、両手を挙げて降参した。

九郎の笑い声が聞こえて、少し嬉しくなった。考えたら、彼はずつと結に付き合ってくれていた。少しは自分の時間も欲しいだろう。

九郎に貸してもらったマフラーに埋もれながら歩いて帰っている、と、こんばんは、こんばんは、すれ違う度に会釈され、慌てて返した。本当に大変なものももらってしまった。

八百屋の前を通ると、りんごをたくさんもらってしまった。丁重にお断りしたが、あまりに勧めるので、ありがたく持って返った。甘そうなりんごが嬉しい。

「よう、お嬢ちゃん」

「一人かい？」

最近思っただが。自分は、ものすごく運が悪いのではないか。

目の前の男たちは、悪事が服を着て歩いているような、どこからどうみても悪者だった。悪そうに笑いながら自分を見下げ、りんごの袋を取り上げてしまった。

「買物かい？偉いねえ」

「お兄さんたちと遊ぼうよ」

やらしそうに笑い、男たちが一歩、また一歩と近づいてきた。かなり迷ったが仕方がなく首輪を握ってみると、奥の男が小さく口笛を吹いた。

「おいおい冗談だろう、ってことは、この小さいのが九郎の……」

「おい、お前。こいつの血を流してやれ。九郎を服従させるいい機会だ」

この男たちは兵の格好をしてないし、絶対に九郎の味方ではない。そう判断した結は、そのまま駆け足で逃げ出したが、奥からの手に猫のように捕まれてしまった。まだ輩がいたらしい。

「さて、どう傷つけようかなあ」

「おい、何をやっとするか！この愚か者供め！！」

高らかな声に振り返ると、結はそのまま見入ってしまった。年の頃は十五前後、すらりと伸びたよく日に焼けた長い足と、燃えるように赤く長い髪が、足元の雪によく映えていた。全身派手な布を組み合わせたような服と装飾品が、人形のような美しい顔となぜかよく合っていた。

「おい、またガキが来たぞ！」

「お前の不倫相手か？」

男たちが馬鹿笑いした、その刹那だった。

結を掴んでいた男は吹っ飛び、まばたきすると結は派手な布の胸元にいた。

何が起こったのか結はもちろん男たちも分かっている様子はなく、何がなんだか、混乱した男たちは慌てるように剣を取った。

「おい、やっちまえ！」

「そんな汚い顔で…僕に近寄るな！」

たくさんの風、また風、少年の手から産まれたたくさんの風で、悲鳴と共に男たちはあつという間に飛んでいってしまった。開いた口がふさがらないとはまさにこのことだ。

「おい、大丈夫か」

「-は、はいっ」

助けてもらってしまった。慌ててお辞儀をすると、指輪だらけの手が、結の顔を掴んだ。

「ふむ、なかなか美しいな。僕のところには嫁がせてやってもいいぞ」



「…申し訳ありません。それは」

「む、なんだ、即答か。そんなに九郎がいいか？」

「そう、ですね」

自分は九郎がとても好きだ。それに…

「女の人と、結婚できません」

少年、否少女が、真っ赤になって、結から慌てて離れた。

「な、ななななななな」

「…あ」

口調から、格好から、やはり秘密だったのか。謝ろうとすると、またすごい勢いで少女が戻ってきた。

「どうして分かった！」

認めてくれた。どうしても何も、先ほど助けてくれたときの胸元の感触が、筋肉ではなかったからだ。しかしそれを言うのは例え同性でも失礼な気がした。

「とても…お綺麗なので」

我ながら酷い言い訳だったが、他に思いつかなかった。本当に、そう思ったから。そろそろと顔を上げると、少女はそれこそ本当に少年のように、悔しそうに頭をかきむしった。

「あああもう、最悪だ！いいか、お前…っ、ええと」

「結です」

「そうだ、結だ！結、僕は絶対に女だと知られるわけにはいいかないんだ。僕が女だってばれたら…っ、僕はどうしたらいいのか…」

するとずっと強気だった肩が小鳥のように震えだし、結が思わず手を握ると、そのまま、少女がその手を見つめた。

「誰にも…言わないでくれ」

「分かりました。誰にも言いません」

「ありがとう…ありがとう。僕の名前は、一己。家まで送る、そ

れくらいさせてくれ」

「ありがとうございます」

屋敷に戻り、一己とりんごをむいて食べていると、ほどなくして九郎が帰ってきた。

「ただいま！結、だいじょつ」

ぶ、が風に消えた。笑顔が固まった九郎の視線の先には一己がいて、彼女もとても優しいとは言えない笑顔で立ち上がった。

「よう九郎、息災のようだな」

「…っ、てめえ、山猿！！」

酷い呼び名に、結は思わずりんごを吹きそうになった。九郎は女の子に絶対そんなことは言わない。嘘は通じてるようだ。

「人ん家で何してんだよ！結に何した！」

「あの九郎様、一己さんは、私を助けてくれて」

「何？」

「そうだぞ、お前がへらへら遊んでいる間に、僕が助けてやったのだ。危ないところだったのだぞ。まあ、あいつらの気持ちも分からないのではない…こんなに美しいのだからな。だから僕も求婚した」

「はあ！？」

一己に軽く抱きしめられながら、結は二人の様子をうかがっていた。挑発され、九郎はどんどん怒りで顔を赤くしていくのに対し、一己はずっと余裕そうに笑っていた。

「冗談じゃない、結を離せ！」

「誰が。なあ、結。お前も冬より、夏が好きだよな？」

「え？」

「王子なんかより、王がいいよな。僕は、夏の里の王だぞ」

驚きすぎて声も出ないとは、このことだった。



## はじまりは銀世界・8

冬の王子の次は夏の王か、驚きすぎて魚のように口をぱくぱくさせている結の前で、九郎たちの言い合いはますます白熱してきた。

「こいつなあ、俺の大事な家族なんだぞ！王だろうが何だろうが、こいつを簡単に嫁にやれるか！大体、てめえもこの子もまだ子供じやねえか！」

「はん、これだから時代の残党は……いいか、明日何があるか分からぬのだぞ？そんなときに呑気にやれ子供だやれ早いだと言っられるか。僕は後悔などしたくないのだ。僕は嫁にもらうと言ったらもらう。お前こそどうなんだ」

「何がだよ」

「結が本当に好きなのか？女に免疫がなさすぎて、一緒にいてくれるのなら誰でもいいのではないか？」

「お前っ」

さすがに怒って反論しようとした九郎が、ふと結と目が合って、そのまま固まった。今自分がどんな顔をしているのかは分からないが、九郎の様子からして普通の顔はしていないらしい。

「くだあもう、いいから離れる！すぐに！兵を呼ぶぞ！」

「おーおー威勢のいいことだな。僕をどうするつもりだ」

「死罪」

「ええ！？」

驚いて声を上げてしまったのは結の方だった。いくらなんでも極刑すぎる、というかやりすぎている。すると結を抱いたままの一己がけけらと笑った。

「僕を殺すのか？そうなれば全面戦争だぞ」

「ああ上等だ！冬の底力なめんなよ！」

「あ、あのっ」

どこまで本気が分らないが、戦争は駄目だ。九郎が辛いことを思い出す。焦る結の前で、二人はまだ言い合っていた。もう早口すぎて白熱しすぎて何を言っているのか分らないところまで進展してきた。どう止めようか焦ったそのときだった。

「夜分に何の騒ぎだ…外まで筒抜けだぞ」

決して大きくはないが、鋭く厳しい声に、先ほどまで熱戦していた二人は嘘のように押し黙った。まさかと思つて顔を上げると、やはり犬神だった。

「九郎君、いつまでも子供のように大声を出すな。君はいずれ冬を支配するのだろう」

「…っ、すみません」

「一己。君もいつまで冬にいるつもりだ。王族同士が簡単に謁見しては、妙な噂を立てられても文句は言えない」

「は、はい」

あの一己が大人しく返事をし、正座までして、九郎も続いた。その様子に犬神は小さく頷き、そして大きな包みを取り出すと、結に差し出した。

「これを着て祭に出なさい」

「わざわざ、ありがとうございます」

「ばば様からの命令だ」

ばば様とは王様のことだろうか、そうだ、と思い出したように結が首輪を差し出した。

「あの、これ、ありがとうございます。とても助かりました。でも私には…」

ふ、と犬神と目が合つて、そのまま引き込まれた。もう恐怖は幾分減ったが、その代わりに、鋭さ以外の別の色も見えた。とても、

とても悲しい目。

そのまま目を見てみると、犬神は結に首輪を押しやり、そのまま帰っていったしまった。すると、やれやれと一己が正座を崩した。

「あのクソオヤジ」

「犬神さんを悪く言うな」

「…っ、ふん。まあ、いい。今日は帰る。祭には僕も出る。お前は朝から出なければならならんだろう、結は僕が迎えに行くから」

「ああ、そうしてくれ…玄関まで送る」

そう九郎が言うつと一己はむつと少し赤くなり、結の手を強く引いた。

土産だと一己がどこから出したのか、色とりどりの果物を両手で抱えきれないほどくれた。ありがとうございます、とお礼を言つと、彼女はにっこり笑って、頭をくしゃくしゃに撫でてくれた。

「お前は犬神と九郎、どちらが王にふさわしいと思う？」

「…え？」

「本当はな、犬神がこの王になるはずだったんだ」

知らなかった事実が結が目を丸くすると、一己が小さくため息をついた。

「彼はその名前の通り、代々王族の血なんだよ。あの人は厳しいけどしっかりしている、対して九郎は優しすぎる。おまけに城も嫌っていた。誰もが継ぐのは犬神だと信じていた。けどば様が指名したのは、九郎だったんだ。犬神は言い返しもしなかった。それどころか、喚く九郎をなだめていたんだ。僕は、王座に行こうともしなかった犬神が理解できない」

「それは」

犬神にも犬神の事情があるんだろうと、言いたくても言えなかった。目の前に性別を偽ってまで、王をやっている一己がいるのだから。

「僕はこんな風だから、九郎と喧嘩しかできない。犬神にも逆らえない…身体検査でも万が一されたら大変だからな。だから、結。九郎に優しくできるお前が好きだよ」

「…一己様は」

九郎が好きなのか、と聞けなかった。なんだか言い様がないような恐怖に負けて、聞けなかった。

「ん？何？」

「いえ。あの、果物たくさんありがとうございました。帰り、気を付けて下さいね。雪がまた深くなってるから」

「関係ないさ」

そういつた瞬間、一己が跳び上がると、そのまま大きな鳥になって、空へ消えてしまった。美しい難色にも連なる羽は、一己が着ていた服のようだった。

「また会おう、結。祭の日を楽しみにしている」

「はい」

結が一己を玄関まで見送ったまま戻ってこない。気が気でない九郎だったが、いつまでも待っているのもなんだか間抜けで、先に寝ていることにした。結の布団まで敷いてやり、ふと思いついたように湯浴みに向かった。

寒いため長湯になったが、まだ結の布団は空だった。まさかまだ話してるのか、さすがに玄関に向かおうとした九郎が足を止めた。そろそろと布団をめくると、熟睡した結が、九郎の布団の中にいた。こつちじゃないだろ、と笑って九郎は小さな体を抱いて両目を閉じた。

翌朝、いつも通りの極寒と、布団の温もりと結の温もりが色々相乗し、九郎はすっかり寝坊してしまった。結も同じだった。

王子が城に出勤してこないため、犬神の命令で迎えに来た兵たちが扉をどんどん叩くが、熟睡した二人は目を覚ましもしない。

大分迷ったが、何より犬神が怖いため、兵の一人が失礼します、屋敷へ入った。前に来たときは王子相手に失礼を承知で思い出すが、とても汚く殺風景だった。だが今はどうだろう。台所から異臭もないし、むしろ美味しそうな残り香までする。洗濯物は綺麗に片付き、掃除も行き届き、玄関には花まで飾ってあった。

まるで新婚家庭にお邪魔したようだ、なんだかいたたまれない兵は、九郎の言葉で元気になった。

・結はまだ12だぞ！まだ子供だ、嫁になんてするわけないだろう！  
う！

まったくおつしやる通りだ、自分は何を照れているんだろう。きつと九郎の寝室をぶち開けたところで、何も問題はない。

「九郎様！失礼します、ご出勤の時間に……」

目の前には、半裸と九郎と、その胸元にうづくまる結がいた。

二人が飛び起きたのは、すごい勢いで逃亡する兵の足音だった。

着替えた九郎が馬車に乗り込み、兵たちも続いた。なんだか異常に空気が重い。九郎が嫌そうに顔を上げると、ある兵は目を反らし、ある兵は無理矢理に笑い、ある兵は平静を装っていたが妙にこめかみが揺れていた。

完全に誤解をされている、九郎が重いため息について、軽く拳手をした。

「あのなあ、俺は寝相が悪いんだ。着物ほとんど着崩れてる、別に結とは何も」



「…！はっ！奥様ならご心配ありません、今、一己様がお屋敷に」  
「奥さんって言うなあ！」

その頃結はといえば、台所で寝ぼけながら皿を洗っていた。兵がいた気がするし、なんだか九郎が妙に焦っていた気がする。遅刻して怒られないだろうか、なんて大あくびしながら心配をしていた。お皿が片付いた頃、扉を何度か叩く音があった。手を拭いて玄関まで走ると、頼もつ、と元気な声がして、思わず笑って扉を開けた。やはり一己だった。

「おはようございます」

「…」

「…一己様？」

思わず顔を覗き込んでしまった。なんだか、お通夜みたいな顔をしている。何か声をかけようとしていると、両肩を叩かれた。

「僕は…他人の色恋沙汰について何かいう趣味はないが…もう少し年齢を考えた付き合い方を」

「はい？」

「お母さん見て、鳥さん！」

「綺麗だねえ」

「あ、誰か乗ってる」

「いいなあ」

鳥になった一己の背中に乗って、結は里の上空を飛んでいた。怖がらないように配慮してくれてるんだろう、あまり空高くは飛んでないため、注目的になっっている。恥ずかしいが、それ以上に爽快だった。しっかり捕まった結を乗せて、一己はずっと笑っていた。

「そうか、そうか、ただ寝ていただけか。そんなことだろうと思

った。僕は危うく九郎を殺すところだったぞ」

「よかった」

保健体育程度の知識ならあったが、そういうことにどちらかといえば疎い結は、一己が何をそんなに心配しているのかよく分からなかった。が、九郎の為に誤解は解いた方がいいことだけは分かった。

「そうだ、そこに団子屋があるんだ。一緒に食べよう」

「はい」

「おかわり！」

わんこそばのように一己は次々と団子をおかわりしていった。こんな細い体のどこにそんなに入るのか、店員がまた笑いながら団子を持ってきてくれた。

「彼氏よく食べるわねえ」

耳元でそう囁かれ、団子が詰まるかと思った。みんなどうして男に見えてしまうんだろう。こんなにも美人なのに。

「そうだ、結。お前は異人だそうだな」

「はい」

「元の世界に帰れる宛てはあるのか？」

「いいえ、今のところ」

「それでは…これから先、どうするのだ？」

「…そう、ですね」

団子を置き、結が世界を見渡した。

始めは長い夢だと思っていた。しかし、夢はいつまで経っても終わる様子はない。それどころか、最近ではこちらの方が日常になっ  
てしまっている。テレビも携帯もない、でも九郎や優しい人たちが  
いるこの寒い世界で、自分はどうなっていくんだろう。帰れるとし  
ても、何年後になるのか、もしくは一生いる羽目になるかもしれない  
のだ。

「このままでは九郎の嫁にされるぞ」

「私は、構わないんですけど」

というか正直、願ったり叶ったりだ。でもそれでは、九郎の可能性を全部潰してしまう。忘れがちだがあの人は王子で、将来この里の中心になる人だ。自分はといえばついこの間まで別の世界の人間で、なおかつ子供だ。九郎の支えになんてとてもなれないし、何より甘えてばかりで、九郎を満足させる年齢にもまだまだならない。

「でも、それは私の願いだから」

「よし、働くか」

「は？」

働く、思いもしなかった言葉に、一己はもう決意してしまったようで、いきなり立ち上がった。

「今は女も働く時代だ。働けば少しは気が楽になるだろう、男の金だけで暮らしているから、悲観的になるのだ」

「は、はあ」

言ってることはまともだが、なんだか根本的に間違ってる気がする。すると一己はいきなり鳥になり、結を足から引き上げてしまった。

「よし、就職活動に行くぞ！」

「え、ちよっ……」

空高く舞われ、結が必死で一己の首を掴むと、もう地面が遠くなっていた。下では団子屋のおばちゃんが盛大に怒っている。そういえばお金はまだだった。

食い逃げをしてしまった、顔を青くする結をよそに、一己はすごい勢いでどこかへ飛んでいった。

## はじまりは銀世界・9

ものすごい勢いで飛んでいく一己に必死でしがみつकिながら、落ちないように必死で気を配っているうちに、あつという間に地面が近づいた。人間の姿に戻った一己に肩を叩かれると、目を疑った。目の前は、どう見ても冬の城だった。

「おい、行くぞ」

「ちよ、ちよつと」

焦る結の声も聞かず、一己はどんどん歩いていった。

いきなり子供二人が城に乱入してきた為、兵どころか女たちまで飛び出してきたが、頭を下げるのもまた早かった。一己は結の首輪を掲げるように歩いていったのだ。しばらくそのまま歩いていくと、周りより良い服を着た女性が一人、頭を下げながら跪いた。

「失礼致します、一己様とお見受けします」

「そうだ。僕だ。お前、暇か。ちよつと話が」

「申し訳ありません、女王様がお呼びでございます」

「ばあ様が!?!」

らしくもなく慌てた一己が、いくらか足を無意味に動かした後、しつかりと結の肩を掴んだ。

「では行かねばな…すまないな結。この詫びは必ず」

「いえ、そんな。大丈夫です、一人で帰れます」

「何を言っておるか」

ちよいちよいと女性を手で呼びつけた一己が、彼女にいくらか耳元で囁くと、元気に奥へ飛び出してしまった。あの方向は確か、女王様がいらっしゃった部屋だ。

帰ろうかどうか結が迷っていると、先ほどの女性が軽く手を握っ

てきた。

「さあ、どうぞこちらへ」

「え？」

案内されたところは、よく片付けられた茶室だった。お茶やお菓子のいい匂いがする。先ほどたくさん団子を頂いたのですがお菓子はいただけそうになかったが、お茶は遠慮なく頂いた。とてもいい香りだ。

「さて、職を探されているとか」

一己が説明してくれていたのか、結は思わず姿勢を正した。

「九郎様の奥方でいらつしやるのなら…失礼ながら、必要はないと思いますが。それともあの方は、豪遊されていらつしやるのでしょうか？」

結は思わず強く横に首を振った。空想の中でしか知らない王子様たちとは、考えられないくらい九郎の生活は普通だ。召使いは一人もない、屋敷には自分と九郎だけだ。穴の開いた靴下を履いてしまっていたこともあるし、外食だって庶民の居酒屋にしか行っていない。おまけにそれも、自分が自炊するようになってからはめっきり数も減った。

「では、それでも働きたいと」

「…それは」

正直、働くというのは一己の提案だ。しかし、考えてみた。この城で、何か出来ないだろうか。九郎を支えることが、少しでも。

「出来れば、働きたいです。ここで」

「失礼ですが、いくら大金を稼いでも、世界を渡ることなど不可能ですよ」

「それは…私は」

いきなり。いきなりさよならしてしまった世界。ありがとうもこ

めんなさいも言えなかった。

たくさんの言葉を伝えに、戻りたい。でもそれは、きっと九郎たちと永遠に別れることになる。

「帰りたいのか…帰りたいのかよく分かりません。けど、ここにいさせてもらってる以上は。九郎様のお役に立ちたいです」

「九郎様を好いていらっしやるんですね」

「恋とかは…よく分かりません。すみません。けど、あの人の役に立ちたいのは本当です」

「素直な子」

ふ、と溶けるように笑ってくれた女性が軽く長い前髪をかき分けると、息を飲みそうになった。なんて酷い火傷の跡だろう。すると次の瞬間にはもうそれは見えなくなっていて、慌てて平静を装った。彼女は変わらず笑っていた。きっと、全てお見通しなのだろう。

「私は九郎様の教師をやらせていただいたこともあります。だから、あの方の性格も少しは知っています。あなたがお金を稼いだところで受け取らない。違いますか？」

「それは…はい。そう思います」

「では、こうしましょう。お金の代わりに何か差し上げるということで。何か欲しいものは」

「醤油…!」

思わず叫んでしまった結を見て女性は目を丸くして、さすがに少し恥ずかしくなった。

「…っ、すみません…ちょうど、切れてしまっていて…」

すると、ほどなくして女性は声を上げて笑った。

「姫様の料理は美味しいそうですね…分かりました。食べ物や調味料、調理用具を対価にしましょう。そして世界を渡る手段がもし見つければ、真っ先にあなたに知らせましょう」

「ありがとうございます」

「そう…得意は家事なんですね」

「ぱらぱらと本をめくり、彼女がため息をついた。」

「駄目、ですね。調理場が定員一杯だわ。掃除婦も足りている」

「そうですか」

「では…これはどうでしょう」

「はい」

「女王様を起こす係」

「は？」

思い切り失礼な返事を思わずしてしまったが、彼女は気にせず話を続けた。

「女王様の目覚めの悪さは筋金入りで…目覚まし十個あってもお目覚めにならないのです」

「…それはそれは」

呆れを通り越して感心してしまう。

「寝相も激しくていらっしゃって…この前も、おみ足を頂いた剣士が頭蓋骨を」

「ええ!？」

「止めときましようね、これは」

また失礼を承知だが、結は何度も頷いた。さすがに頭蓋骨は守りたい。

「では、兵はどうでしょう」

「兵、ですか」

「といつても、姫様を守りになど行かせては、私の首が飛んでしまいます。ある部屋の前で、立っているだけです。当然食事もお出ますし、人もほとんど通りません。まず危険はありません。眠りさえしなければ、本を読んでも、何をして構いませんわ」

「それは…」

確かにそれは自分でも出来そうだが、いくらなんでも楽すぎやしないか。しかしせっかくの勧めだ、やるだけやってみてもいいかもしれない。

「その部屋を見せていただいてもいいですか？」

「ええ。もちろん」

部屋まで案内されている途中、若い兵たちが声を張り上げながら剣の訓練をしていた。中には自分くらいの子供もいて、思わず見入ってしまった。

「いずれ、あなたの兵になりますわ」

「そんな」

自分に兵なんてもったいなすぎる、結がその場を去ろうとすると、兵たちが慌てて頭を下げた。

「姫様！」

「姫様！お疲れ様です！」

「馬鹿、お疲れ様ですはおかしいだろ！」

子供の兵が頭を軽く殴られてしまい、結は思わず笑ってしまいそうになった。厳しいだけの職場ではないらしい。

「あの、姫様。俺たち、姫様に懂れて」

「え？」

「たった数日で九郎様の奥方になったなんて…普通じゃない。一体、どんな能力をお持ちなんですか？」

「九郎様は、恐ろしい獣に化けることができるのか」

今度は吹き出しそうになった。可愛い、はさすがに失礼かもしれないが、大きいけど犬に化けられることに、少し尾ひれが付いているらしい。

「奥様は何に化けられるのですか？」

「それとも、何か特別な力がありなんですか？」

若い兵たちに興味深そうに近づかれ、結がたじろいでいると、女



性がぴしやりと手を叩いた。

「止めなさい。姫様はお忙しいのです、さあ、行きますよ」

「待て、小梅」

年長者の兵が顔を出し、女性が足を止めた。彼女は小梅というらしい。

「わしも興味がある。彼女が一体、何なのか」

若い兵たちとは違い、彼の目は厳しく、どこか始めて会ったときの犬神に似ていた。自分を警戒するような目に、小梅は声を荒げた。

「いい加減になさい！姫様になんて無礼を」

「あそこに壺が見えるか、お姫様」

そういう兵の指先を追うと、遙か高い天井近くに大きな青い壺が見えた。

「あの壺を、ここに飛ばせてくれねえか。俺たちじゃどうやっても届かなくてな」

「ちよつと！」

「できないのか。ばば様なら、これくらい寝てたって出来るぞ」  
そんな。そんなことどうやって出来るわけがない。でも。

「姫様！」

どうして自分は手をかざすんだろう、こんな両手をかざしたって

ばぁん！！

壺が、粉々に粉碎してしまった。中は酒だったらしく、酒の匂いがその場に立ちこめた。

いくらか時間が経つと、兵たちは震え上がり、結に槍を向けた。あまりの出来事に固まってしまっていた結だったが、刃先を見て更に動けなくなった。

「ばばは化け物だ！」

「九郎様は、化け物に取り憑かれている！」

「…っ、控えなさい！！」

小梅が慌てるように、自分を高く抱いてくれた。体温が近いから、彼女の手が震えているのがよく分かった。

「この方は、九郎様の奥方です！そのことを忘れたなどと言わせませんよ！このことは、ばば様に報告させていただきます！」

小梅はそう叫ぶと、兵たちを押しつけ、結を抱いたまま廊下を走った。そして誰もいない廊下の奥までたどり着くと、彼女は酷い咳をした。それほど体が強くないのだろう、慌てた結を、小梅が強く抱きしめた。

「姫様」

「…はい」

「あれは、なんですか？」

「わかり…ません…手が、勝手に」

我ながら酷い言い訳だったが、他に言い様がなかった。兵たちが怖くて手どころか指も動かなかったのに。

「信じましょう」

「…信じてくださるんですか？」

「もちろん。私は九郎様の味方ですもの」

小梅は更に結を強く抱きしめながら、まるで物語を話すように、ゆつくりと結に話し始めた。

「今日はとりあえず帰りなさい。彼らは私が黙らせておきますから…いいですか。今日のことは、忘れてしまいなさい」

「はい」

兵たちが籠で送ってくれるようだったが、丁重に断った。ふらつく足で里までたどり着く頃にはもう夜になっていて、屋敷はもう明かりがついていた。扉を何度か軽く叩くと、九郎が玄関まで走ってきて開けてくれた。

「結！よかった、無事だったか…一己の野郎が、お前と城ではぐれたとか抜かしやがるもんだか」

九郎がふ、としゃべるのを止めた。自分の腹にしがみついていたのを結と認知するまで、数秒かかってしまった。

「…屋敷に入ろう。風邪、引くから」

結が小さく頷くと、九郎は彼女を抱いたまま、屋敷へ入っていた。

九郎には教えなくなかったが、他に話す相手も思いつかなかった。今日あったことを全部話した。九郎はじつと黙って聞いてくれていた。

「私、今日の小梅さんの話を聞いて思ったことがあるんです。

この世界には世界を渡る手段なんてない、そんな力もない……だったら。世界を渡る原因は私にあったんじゃないかって。今まで気づかなかっただけで、私には力があるかもしれない。恐ろしい力が」

「…結。お前の世界には犬になれる人間がいたか？」

「…っ、え、いいえ」

「でもお前は、前も、今も、俺を信用してくれている。一度も怖がったことがない。どうしてだ」

「それは」

恩人だから。お世話になっているから。

大好き、だから。

「九郎さんは、九郎さんです」

「俺も一緒だ。お前はお前だ。そうだろう」

ずっと我慢していた涙が溢れ出した。そのまま流していると、次のまばたきをする頃には、九郎の胸元にいた。

「大丈夫。俺も一緒に考えるから。考えるの、苦手だけどな。結の為なら頑張るよ。けど、結。一つ約束してくれ」

「はい」

「何かあったら、必ず俺を頼ってくれ。いいな。お前が来る前、俺がどう生活してたかなんて、もう思い出すことも出来ない」

「はい」

頷きながら、この為だったらしいのにと考えた。この人の寂しさを埋めるためにこの世界に来た、それだけの為だったらしいのに。

## はじまりは銀世界・10

翌朝は、ものすごい犬の鳴き声に飛び起きた。すごい数だ、一匹や二匹ではないだろう。隣に寝ていた九郎から「あいつらに殺虫剤をまいてこい」と恐ろしい命令を受けたが、まさか承諾するわけにもいかず、厚手の着物を一枚羽織り、結は急ぎ外へ出た。

玄関の外はなんとというか予想通りの光景だった。庭を敷き詰めるような犬、犬、また犬。その犬がやたら吠え続けているので、結が思わず両手を叩くと、犬たちはようやくこちらを向いて、黙つてくれた。

「姫！」

「姫様、おはようございます！お迎えに上がりました！」

人間の言葉と混じりながら聞こえてくる犬の鳴き声、結はたまらず両耳を塞いだ。

「お、お迎えですか？」

「そうです！お祭りです！」

「お祭り？」

そうだ、確かそんな話があった。まさか今日なのか、と思わず驚いてしまった。九郎は何も言っていなかったし、もちろん他の誰にも聞いていない。

「今日なのですか？」

「そう、急に今日になったのです。五要様がお目覚めになられたので」

「…ごよう、様？」

「ああ、姫様はご存じないのか…秋の王様です」

「一年に一回しかお目覚めにならないんですよ」

「ええ！！」

思わず大声で驚いてしまった。それが本当ならすごい話だ、失礼だが健康よりもっと前の、生死を心配してしまう。

「五要様は次はいつお目覚めになるか分かりません。夜には必ず丘へお越し下さい。姫様、夜までに風邪など召されないよう」

「ありがとうございます」

思わず丁寧に頭を下げると、あまりの異臭にむせてしまった。大変失礼だが、よく乾いてない洗濯物の固まりのような匂いがする。

「…あの…皆さん。失礼なことを聞いてもいいですか？」

「え？」

「なんですか？」

「最後にお風呂に入ったのは…いつですか？」

びっくり、と両耳を動かした犬たちが、お互いを嗅ぎあい、そしてまた吠えたてた。

「おい、お前！臭いぞ！姫様がむせておられる！」

「そつちこそ臭い！そんなことで姫様がお守りできるのか！？」

お前だ、いやお前だ、ワンワン吠えながら醜く争い合う犬たちを見て、結は今まで一番大きい音で両手を叩いた。

「皆さん…ちょっとお時間いいですか？」

平和に二度寝していた九郎がやっと起きてきて、のそのそと居間へ向かったが、結はいない。あれ、と玄関を覗いた。靴はある。洗濯が何かかと脱衣所を覗くと、九郎はそのまま足を止めた。

風呂を敷き詰めるような犬…まあ、自分の部下たちなのだが、それが次から次へ結により芋のように洗われている。結はといえば、着物をまくりあげ、腹が丸見えだった。それも気づかないくらい真剣な顔つきで犬を洗い続けている。

固まつてる九郎の元へ、すっきりした顔の犬が一匹近づいた。

「ああ、九郎様、おはようございます。姫様に洗っていただきましたま

した。どうですか？もう臭くないですか？」

「…っ、お、おまつ、お前等！！」

ようやく我に返った九郎が怒りで叫ぶと、犬たち、そして結がぎよつと彼を見た。

「何してんだ、結と風呂になんか入りやがつて！出てけ！見るな見るな、結の腹を見るな！！」

「く、九郎様…犬さんたち、お風呂に入ってたみたいだから」

「俺も犬だ、ボケ！」

「ぼっ」

九郎からの恐らく初めての罵倒に未来が少なからずショックを受けている後ろで、濡れた犬たちは必死で笑いをこらえていた。動物相手に嫉妬する上司は、失礼な話だが、大変滑稽だった。

九郎は完全にへそを曲げてしまい、口もろくに聞いてもらえないまま、結は犬たちにつれられて祭会場につれていかれた。割と大きな犬が背中に乗せてくれた。道行く子供に「わんわん」と指さされてしまったが、慣れてしまえば快適だった。

「姫様、もう臭くはないですか？」

「だ、大丈夫です…なんか。すいません」

「いえ。いいですよ。それにしても姫様、よくお似合いだ」

「そう、ですか？」

今着ている着物は、犬神から祭りのときに着なさいと渡されたものだ。美しい桜柄の着物が気恥ずかしい。

「姫様、妙なことされそうになったら、我々が守ります故」

「あ…ありがとうございます」

「なんならば、今から間者を飛ばしますよ」

「いえいえいえ」

自分は普通だということを証明しに行くのに、それをやる前から

不正をしてしまつては元も子もない。それに……

自分の拳を、ぎゅつと握る。あの日から、なんだか自分の手が自分のものじゃないみたいだ。あの力は一体なんだったんだろう。また、出たらどうなるんだろう。

ふ、と下を見ると、足を止めた犬たちが一斉にこちらを向いて、心配そうに小さくわんわん吠えていた。久しぶりに、声をあげて笑つてしまつた。

犬たちとは感謝と供に一反別れ、会場へ行つた。出店が並び、中央には高い舞台がある。自分がよく知っている祭と一緒だ。中央へ歩いていくと、大きく手を振つていてくれる一己が見えた。

「結！」

「一己様」

走つていくと、軽く抱きしめ、頭を撫でてくれた。

「すまないな、迎えに行けなくて。五要が急に起きるなどと抜かすから、用意に手間取つてしまつた。あいつ例年なら、あと一週間くらい寝てるのに」

「本当に一年お休みされてるんですね……一己様、気になさらないで下さい。お忙しいんですから」

「お前は本当にいい子だなあ、九郎にもつたいな……ん？そうだ、九郎はどうした。もう着いていい頃だろう」

「それが……怒らせてしまつたみたいで」

「は？」

「口も聞いてくれなくて」

なんだか話し始めると本当に悲しくなってきた、沈んだ結の向かいで、一己は慌てた。

「し、心配するな。な。あいつはああいうやつだから、時間が経



てばまた、へらへら笑ってるぞ」

「…はい」

一己の気遣いには嬉しかったが、素直に心から笑えなかった。一己が九郎のことを語ると、どうしようもなく悲しくなる。その距離と時間の差に。

今日は雪もなく、絵に描いたような快晴だった。昼頃になると眩しいくらいで、一己は頭に巻いている美しい布を、結の頭に巻いてくれた。彼女が買ってくれたリングアメと一緒に食べながら、二人で出店を見て回っていた。すると、ふと広場に出た。そこではたくさんのお客たちが笑いながら、壺に向かって手をかざしていた。

「なんだ？何をやっている」

「ん…あ、こ、これは一己様！いや、実は。城で、手をかざすだけで壺を割った奴がいる、などと噂がありました」

「それで、道行く輩が試しているのです」

「なんだそれは」

軽く笑う一己の隣で、結は体温が下がるのを自覚した。自分のことまでは分かっているようだが、知られてしまっている。

「よければ、一己様も」

「僕はそんな面妖な力はないぞ…ほら！」

一己が手をかざすと、壺は宙へ跳んだ。それでもすごい力だ、周りの男たちが拍手する中、ふと誰かが結を見た。

「おや、そちらは？」

思わず一己の後ろに隠れそうになったが、そうなる前にかばうように抱いてくれたのは彼女だった。

「僕の友達だ。なんでもない」

「そう、言わずに」

「そら」

勧められると、手がまた勝手に動き、結は喉の奥で小さく叫んだ。

まただ。また勝手に割ってしまつ。震える手を必死に挙げまいとあらがっている、ふと一己が反応した。

「くせ者!!」

ぱん!!

一己が剣を投げると、右脇にあった出店の一部が壊されてしまった。すると、明らかに黒い影が消えてしまった。今、そこで誰かいたようだ。壺を囲んでいた男たちが我先へと逃げだし、店の者もさすがに怒ったようだ、一己を認知するなりすくみあがつた。

一己はそのまま剣も拾わず、結の手を引いて、早足で人気のないところまで歩いた。小走りですいていった結の両肩を掴んだ彼女の顔は、今まで見た中で一番真剣な顔つきをしていた。

「いいか結。落ち着いてよく聞け」

「はい…」

「お前を…お前を、操ってる者がいる」

「え？」

「誰か分からない。検討もつかない。けど、これだけは言える。お前に力があるように見せようとしている奴がいる。どうしてそんなことがしたいのか分からないけど…」

そこまでしゃべって、一己は深く頭を下げた。

「すまない。僕は聞いてしまったんだ。お前が城で壺を割ったこと。だから、もしかしてと思っていたけど…お前に力があると、皆の前で証明したい奴がいる。辞退しろ、結。九郎の妻のお前ならどうにでもなる。嫌な予感しかない」

「でも」

「…ここに、いたか」

空気が変わり、思わず顔を上げると、そこにいたのは犬神だった。

犬に化けた犬神の背中に乗せられ、結は丘を駆けていた。どこに向かうのか、聞きたくても聞けなかった。彼の緊張がこちらにも伝わってきたから。

「ここなら、誰もいまい」

「え？」

祭り会場からずいぶん離れた野原で、人間の姿に戻った犬神が、手のひらほどの大きさの水晶を渡してきた。美しい紫の色だった。

「今すぐしまいなさい」

言われたとおり胸元にしまいこむと、彼は満足げに小さく頷いた。

「何かあったら、それを口に含め」

「これは…なんですか？」

「願いが叶う、と噂のものだ。実際、願いが叶った者はいないがな…いもしない神へ祈るしかないなど、腑抜けにも程がある。君を守る方法が思いつかない」

「犬神様…」

「嫌な予感が当たったようだ。君は、恐らく、さらし者にされる力があってもなくても。ろくな処罰を受けないだろう。力がなければ九郎の屋敷から放り出され、力があるときは春の王に命じられるだろう」

「私が…ですか？」

「上の連中は焦っているんだ。君という、異人に。だから、九郎君の見合い話も急に上がってきた」

見合い、という言葉に思わず目を白黒してしまった。聞いていない、そんな権利ないかもしれないけど。

「もちろん、会いもしないのに断った。上は恐れている。冬の王子の九郎君は君を慕い、ばば様もそうだ、そして夏の王も…秋の王さえも、お前を気にかけている。お前が神になるのを、恐れているんだ」

「神、って」

「昔、いたんだ。春夏秋冬、全てを統べ、そして全ての力を操る

者が。しかし、そいつのおかげで戦争が起こった」

## はじまりは銀世界・11

「神様を…奪いあつたんですか」

「君は察しがいいな…その通りだ。力がないものは、その持てる力精一杯で生きようとする。しかし目の前に圧倒的な力を見せつけられれば、恐れ、そしていずれ欲してしまう。そんなくだらしないことの為に戦争は起こったのだ。だから私は神など信じない。だが、君のことは信じられる」

「信じてくれるんですか？」

「そうだ。世界を渡る機会があつたら、すぐに帰りなさい。祭りでは、何が起こるか分からない。君がこの世界に來た理由が九郎君にあるなら、もう君は十分九郎君の寂しさを埋めてくれた。君が望めば、きっといつでも世界を渡れるかもしれない」

「私を…この世界に呼んでくれたのは、犬神様ですか？」

少し目を見開いた犬神の、口端が少し上がった。笑ってくれた。

「そんな力があつたら、九郎君を悲しませなかつただろうな」

「…っ、すいません」

「いや、構わない」

「犬神様、私なら大丈夫です。せっかく犬神様が作ってくれた機会ですから…頑張ります。信じてくれない人たちはたくさんいるかもしれないけど、信じてくれている人たちもたくさんいるから。だから、大丈夫です」

「君は本当に…っ」

一瞬だった。剣が飛んできて、叫ぶより早く、犬神の胸元にかばうように抱かれ、声が出なくなつた。少しはだけた犬神の胸元から、無数の刀傷が視界に飛び込んできた。きっと彼も、戦争で大切な人たちをたくさん失つたのだろう。

「よう、犬神。一年ぶりだな」

知らない声に振り返ると、男が立っていた。年の頃は九郎と同じくらいだろう。短い橙の髪は美しく、葉色の着物から出る四肢は白く細く、中性的な顔立ちで、性別を疑ってしまうほどだった。

「五要か」

秋の王様の名前だ、結が慌てて頭を下げようとすると、犬神が制した。

「あんたが冬の姫様か…へえ、可愛いけど、小せえな。九郎もとうとう脳みそまで凍ったか？」

「彼女を愚弄することは許さん。貴様、一体何が目的だ」

「ああ？何の話だ」

「彼女を操り、壺を割らせたのはお前だろう」

驚いて五要を見ると、彼は大口を開けて大笑いした。

「そうだ、俺だよ。こいつをなあ、神にしたてあげて、処刑してやろうと思ったんだ。あいつと同じようにしてやろうと思ったんだよ。さんざん利用され、奪われ、最後、戦争の原因だと抜かして処刑されちゃった」

「…っ、酷い」

心から漏れた言葉が、思わず口から出てしまった。神様だって、望まれて力を入れたわけでもないだろうに。

「酷い？本当に酷いのは九郎だぜ、お姫様」

「おい、止める！」

「神はな、俺の妹だったんだ…あの馬鹿が、九郎に惚れやがって…そんであいつは、妹の告白を断りやがった。あいつは落ち込んでそのまま無抵抗で処刑所に連れて行かれたんだよ！あいつの力なら、兵全員焼き殺すくらい、わけなかったのに！」

いつか、パパに聞いたことがある。戦争なんて、起こってしまえ

ば大変な被害をもたらすけれど、原因なんて、ほんとに小さなことだつて。そして終わりも、本当にあっけないものだつて。

九郎から、そして恐らく犬神から、この優しい世界から、大切なものを奪っていった戦争は、たった一人の女の子が原因で始まってしまつて、そして、彼女を犠牲にして終わつていったんだ。

「…犬神様、九郎様は、その話は…」

「知っている…だが、知らないふりをしている」

「え？」

「あの子は、周りから気を使われ、嘘をつかれ、何も気づかないふりをして笑っているまま、時間が止まっているんだ」

ふいに、九郎に会いたくなつた。彼は、どんな思いで城を飛び出したんだろう。どんな思いで、あの広い屋敷に一人でいたのだろう。

「九郎様…」

私は、あなたの寂しさや痛みの少しでも、埋められることが出来ましたか。

ふいに結に呼ばれた気がして、九郎が顔を上げるが、まさかと自分で笑つた。もう彼女なら祭り会場のはずだ、声がここまで聞こえるわけがない。

「さて」

いい加減に行くか、と立ち上がった九郎の腰には、父の形見の剣があつた。

曾祖母も祖父母も厳しかったが、父親は次元が違つた。絶対的な威厳と圧力で、城を、そして母を支配していた。優しい母が大好きだったから、当然父親は嫌いだった。だが戦争が始まり、剣が母に向かつて飛んでくると、身を挺して守つたのは父だった。そして母

は三日三晩泣き崩れ、眠るように亡くなった。まるで父を追うように。

夫婦の絆など、それよりもっと前に愛など、分かるわけがなかった。身を挺して守るくらい愛しているのなら、どうして普段から優しくできなかったのだろう。どうしてあんなに虐げられた男のために、あんなに狂ったように泣けるのだろう。

恋も愛も分らない。分らないから、当然、彼女の思いは断った。だが、結果どうだ。彼女は殺され、五要は悲しみのあまり自ら眠りの呪いをかぶった。悪夢のような戦争はあつという間に終わり、この世界から神を奪う原因を作った自分はお咎めがないどころか、よく生きていてくれたと感謝さえされた。

もう、誰かを愛する必要性を感じなかった。もう、誰も一緒にいようと思わなかった。なのに。

「九郎様」

どうして君を見つけてしまったんだろう。どうして君の中に見つけてしまったんだろう。

いい加減自分の気持ちに自覚した九郎は、覚悟を決めて屋敷の扉を開けた。

彼女は世界を渡ってきたのだ、いずれは帰るのだろう。そしてその時は、すぐそこに来ている。聞こえるはずのない音が聞こえる。これはきっと、彼女を帰す刻限の音だろう。

それならば、伝えなければならぬ言葉がある。父の愛も、母の愛も理解できなかった。そしてとうとう、自分の愛も理解できないまま、別れることになりそうだ。自分には、結に世界を捨ててまで俺と一緒にいるなんて、言う勇氣だけは沸きそうになかったから。まさか自分がこんな臆病でかつこつけな恋心を抱くなんて、思ってもなかった。そしてこれからも理解することはないだろう。



「よし」

気合いを入れて庭に出ると、呼んでもいないのに大量の部下たちが待っていて、またやかましくワンワン吠えていた。もう笑うしかなかった。

「その子を渡せ！」

「誰が渡すか！」

激しく剣が行き交う中、犬神にかばわれながら、結は必死でこの場をどうしたらいいのか考えていた。しかし悩んでも悩んでも、名案どころか案一つ出てこなかった。早くしないと、どちらかが傷ついてしまう。焦る結の耳に、杖の音が聞こえてきた。

「いい加減にしないか、この悪ガキ供！！」

現れたのは冬の女王様だった。彼女は現れるなり、杖で思い切り二人の頭を殴りつけた。すごい轟音だった。実際ものすごく痛かったのだろう、犬神が頭を震える手で押さえつけ、五要は涙ぐんでしまった。

「ゝってえなあ、ばあちゃん！まだ生きてたのかよ！」

「ああ、生きてるさ私は。もちろん九郎もね。あんたみたいに夢ばっか見てないで、ちゃんと現実を生きてるよ。悲しいけど、笑って、生きてるよ。この子を愛してる」

「だけど、あいつは」

「いい加減にしな！」

そういつて女王が怒鳴りつけると、ほどなくして五要は子供のように大泣きし始めた。慌てた結が思わず駆け寄ると、彼はなんとするるように抱きついてきた。

「まったく滅多に起きないもんだから、今、精神年齢いくつなんだい…ほら！姫にごめんなさいはしたのかい！」

「ご、ごめんなさい」

「…い、いえ」

状況が状況でなければ笑ってしまいそうだ。やれやれとため息をついた女王が、今度はうずくまっている犬神の腰をぴしゃりと叩いた。

「ほら、あんたもいつまで痛がっているんだい。図体ばかりでかくなって情けない」

「…っ、頭蓋骨を割ったかと思ったぞ」

女王の前では犬神も敵わないようだ、もう我慢できなくて声をあげて笑った結に、女王の笑い声が続いた。

しばらくそうして笑っていると、結から離れた五要が、そろそろと片手を上げた。

「…ばあちゃん、もう一個謝ることがあるんだけど」

「ん？なんだい」

「…んじやつた」

「は？なんだい？よく聞こえないよ」

「だから…龍。呼んじやつた」

一瞬の静寂の後。

「…はあ！？」

女王の声と、珍しい犬神の驚く声が綺麗に重なった。龍とはいきなりファンタジーな話だな、などと呑気に呆けた未来が事の重大さに気づくのは、すぐ後のことだった。

「…っ、ひぐ、ぐすっ…」

「…あ、あの…もう泣かないで下さい」

「う、うるせえやい」

言いながら涙が止まらない狐の背中、結は困り果てていた。実

はといふかなんというか、これは五要が化けた姿なのである。大きな犬や、大きな鳥の背中ならそれほど抵抗はなかったが、狐の背中となるとさすがに乗っているのが申し訳なくなる。おまけに泣いているし。

「あの、私、歩けますから」

「駄目だ、ばあちゃんの命令は絶対だ」

「じゃあ、私が降りたかったって、言いますから。大丈夫ですよ」

「駄目だ！ばあちゃんは怖いんだぞ、お前、殴られたことがあるか！？」

「…それは、ないですけど…」

恐ろしき女王の威厳、そして怪力である。あの犬神がしばらく動けなくなるくらいだ、きつと相当痛いのだろう。

丘を降りて祭り会場に近づき、出店が見えてきた頃、とうとう五要は圧縮したように潰れてしまい、結が慌てて飛び降りた。

「もっ…もう駄目だあ」

「大丈夫ですか！？」

どうしよう、慌てた結がある出店に気づき、そのまま走っていつてしまった。おいどこへ行く、と声も出ない五要が、次にまばたきをする、お皿を持っている結が見えた。

「よかつたら…召し上がりませんか？」

「え？」

ぴん、と耳を立てた五要が皿を覗き込むと、それはもち巾着からもちを抜いた、要するに油揚げだった。

「少しは元気になったら、いいかと思って」

気まずいくらいの静寂があり、結は頭を下げるしかなかった。狐に油揚げは安直すぎただろうか。

すると五要はいきなり立ち上がり、すごい勢いで油揚げを食らってしまい、あまりの食いつきぶりに皿まで破ってしまった。

呆氣にとられた結の頬を、狐の舌が勢いよく舐めた。

「お、おまつ…お前、いい奴だなあ！」

「あ、よかった、お気に召して」

「おかわり！」

「は、はいっ」

慌てて再びおでん屋に走った結は、笑顔になった五要に笑い返した。なんでも食べてくれる九郎だが、特に肉が好きのため、まさかと思った予感当たってくれたようだった。そうなるとまさか一己は虫が好物なのだろうか、失礼ながら背筋が寒くなった。

## はじまりは銀世界・12

結局おでん屋さんから大量の油揚げを頂く形になってしまった。

店のおじさんも最後の方になると、結の顔を見ただけで苦笑してもち巾着からもちを抜いて、そつと渡してくれた。

またお店に借金を作ってしまった、なんだか非常に申し訳ない結の横で、五要は呑気にひたすら食べていた。そしてようやく落ち着いたらしく、大きく息を吐いて地面に腰かけた。

「なんだ、元気がないな」

「い、いえ別に」

「分かったぞ、金の心配だろ。俺が女に払わせるわけないじゃねえか」

そう言って五要が笑い、おもむろに地面にあつた葉っぱを掴むと、それは次の瞬間にはお札になっていた。日本昔話のような光景に、結は思わず息を飲んだ。さすがは狐、というべきだろうか。

「よし、これで払ってこい」

「いえ、でもこれ…その、葉っぱじゃ」

「何？俺はいつもこれで買い物しているぞ」

「ええ！？だつ、駄目です！！」

思わず普通に叱ってしまつと、後悔で赤面してしまう前に、五要が大きく笑った。

満腹になったのだろう、五要が椅子の上で大あくびをした。彼の隣で、結はいつまでもここにいてもいいのか少し迷ったが、さしあたって問題も見あたらないので、真似て隣に腰掛けた。

「眠くてたまらん…今回は一年寝てないからな。こんなことは始めてだ。お前が世界を渡ってきて、時間の流れがおかしくなったか

もしれないな」

「あ…すいません」

「馬鹿。お前に会えてよかったと言ってんじゃねえか」

そう言うのと五要は少し赤くなり、結はその表情にそのまま見入ってしまった。今そんなことを言われた気は全くしなかったが、謝るのもおかしいだろうし、お礼を言うのはもつと妙な気がした。要するになんと返答していいものか分からなかったのだ。

結がそのまま困っていると、五要が先に口を開いた。

「俺の寝室は、冬の城にあるんだ。秋は治安があまりよくないからな、呑気に一年も寝てられない」

「そうなんですか」

「小梅という女を知っているか」

記憶を辿り、結はあつと声を出しそうになった。自分を雇ってくれようとした、そして自分を守ってくれた女性だ。

「あいつは俺の寝室をいつも綺麗にしてくれてるんだが…俺の夢の中に、先日手紙を送ってきた。もうすぐ、新しい人が入ってくるかもしれないよって。なんでも、小さくて、可愛くて、料理が美味いらしい」

自分のことだと分かるまで、ずいぶん時間がかかってしまった。

「まるで妹みたいだと喜んだが…悲しかった。けど、実際会ってみたら。楽しいかもしれないと思った。一年に一度起きたとき最初に会うのは、そいつでいいかもしれないと思った」

結は小さく微笑んだ。それはとても光栄なことだ。しかし、胸の中のどうしようもない寂しさが消えなかった。

「私の父親、一日に三時間しか寝ないんですよ」

「は？」

唐突な話題に五要は戸惑っていたが、結は話を続けた。

「もちろん、眠そうにしています。残業が続いた日は死にそうだった

て…それでも頑固に、三時間しか寝ないんです。酷い日なんて、二時間ちよつと」

「…ざ、ざんぎょうというのはよく分からないが…何やら大変そうだな。どうしてそこまでして、起きてるんだ」

「もったいないんですつて。やりたいことが多すぎて、寝ている時間が」

そこまで話すと、五要は明らかに怒ったようだった。ある程度予想は出来ていたから、結は特別驚かなかった。

「何が言いたい」

「一年に一度しか起きないつてことは、100年生きたとしても、100日しか生きられないつてことでしょう？そんなの」

「お前に何が分かる！」

そう叫ぶと五要は腰元の剣先を結に向けた。結は動かなかった。

震えが出ないようにするのに、ただ必死だった。

「お前は…なんだ、お前は！父親に愛され、こちらに来て九郎に大事にされ…よほど楽しいだろうな人生は。眠るのがもったいないだろうな。だが、俺は違う！俺は妹を殺された！世界に裏切られた！起きていたつて楽しいことなんて」

「でも、生きてますよね」

「…え？」

「死を選ばなかったんですよね」

「…それはっ」

からん、と五要の手元から剣が落ちた。結がそつと拾う。よく手入れされている、美しい剣だった。きつと小梅が丁寧に磨いているんだろう。

「笑えばいい。俺は、妹を追えなかった。寂しかったけど…怖かったんだ。死ぬのが」

「笑いませんよ。私も例え、父親が死んでも、きつと後を追えま

せん」

「それは九郎でもか？」

「そんなことをしたら、天国でうんと叱られてしまいます。口を聞いてくれないかもしれませんが」

「違うない」

そう言つて五要が少し笑うと、また、泣き始めた。そつと近づくと、すがりつくように抱きしめられた。背は当然五要の方がずっと高いが、まるで小さい少年を慰めているようだった。

「明日：明日、また起きたい。お前を連れて行きたいところがあるんだ」

「よかった」

結が笑うと、五要の抱きしめる力が強くなった。

五要を救えたとは思えない。だが少なくとも、彼にはもつと毎日をしつかり生きてほしかった。生意気だと蔑まれても。

無駄な日々など少しもないこと、教えてくれたのはこの世界だったから。

五要と出店を回っていると、ふと向こうから大きな声が聞こえてきた。

「あー！ー！ー！」

何事かと振り返ると、一己がすごい顔で走ってくるなり、げんこつを作った。

「貴様、五要！起きるなり、姫を攫うとは何事だ！今日こそ殴つてやる！」

そう言つて一己が手を回し始めると、結が慌てて五要をかばうように彼の前に立った。

「あの……いじめないであげてください」

「はあ！？」



「結」

彼は感動したような顔で逃げ込むように結の背中に引っ込んでしまい、一己はどんな怒りで顔が赤くなっていた。

「結、騙されるな！こいつはずるいんだぞ、何せ狐だからな！僕もこいつの悪戯にどれだけ苦しめられたことか…」

「一己は単純だから」

「何！？」

もう止まりそうにない一己と、結を必死で縦にする五要、二人に押し合われ、結は今にも突っ張って伸びきりそうだった。

三人がそうしてもみあっていると、向こうから大きく鐘を叩く音がした。

「大変だ、龍だ！龍が出たぞ！！」

「…龍だと！？」

そうだ、そういえばそんな話を五要がしていた。何事か分かっていない結の隣で、一己はらしくもなく青ざめていった。

鳥に変身した一己の背中に乗り、結は祭会場近くの湖上空まで飛んできていた。見下ろす湖は人々が騒ぎながら囲み、そしてその中心には、冗談のような大きさの蛇・否。

「…龍」

あまりの恐怖に結は落ちないように、必死で一己の首もとを掴んでしまった。彼女は特に痛がる様子もなく、ただ結の恐怖と一緒にいてくれていた。

キャラクターもの等で当然見たことはあったが、そんなものとは次元が違った。角、目、口、あご、髭、そして体。あらゆるものが巨大すぎて、こんなに遠くにいるのに今にも飲み込まれそうだった。それが湖の中でうねり、ひたすら人々を威嚇している。その度に人々は叫んだり怯えたりするが、龍は湖から上がっては来ないため、野次馬が減る様子はなかった。

ふと知っている声の姿を探すと、犬神が声を荒げて野次馬たちを制していたが、彼だけではどうにもならなかった。周りを囲むように九郎の部下の犬たちも吠えたてるが、龍に夢中の民に、その声は届かなかった。

そういえば五要はどうなったのだろう、と視線だけで探すと、木の陰に狐を見つけた。また、泣きそうにしている気がする。その姿に一己も気づいたのだろうか、大きく舌を打った。

「あの馬鹿、龍なんか呼びやがって……！」

「五要様……どうして」

「あいつはいつも考えなしのガキなんだ、年上なんて絶対認めないぞ……僕はあいつのそういうところが嫌いだ」

そう一己が吐き捨てると、ふと彼女が喉の奥で大きく叫んだ。彼女の視線を追うと、結も叫びそうになった。野次馬の中の子供たちが、なんと龍に向かって石を投げていた。

「馬鹿……！」

「一己様……！」

それから、全ての情景がゆっくりだった。自分を乗せたまま一己が突っ込むより早く、龍は子供たちの方へ頭を動かした。彼らが泣き叫ぶより早く、一己が子供たちをかばおうとするが、彼女の体を突き飛ばし、龍に捕まってしまったのは、自分だった。

「結……！」

きつと近くにいてくれているのに、一己の声が妙に遠い。ああそうかかばったんだと、まるで他人事のように、情報のように吸収され、そして理解した。

「結！結！今助けるぞ！」

「止めなさい！」

駆けつけてきた犬神が一己をかばうように抱くと、彼女は泣き叫

んだ。

「結！嫌だ…結ー！！」

返事が出来ない。どうしたんだろう。目も開かない。死んでしまったんだろうか。

いや、きっと違う。世界が、こんなにも暖かい。

まるで長い眠りから覚めたように結が目を開けると、すぐに状況を飲み込めなかった。自分は宙に浮いていて、龍の鼻先がすぐそこにあった。

龍は何をするでもなく、ただじっと結を見つめていた。その大きな、そしてどこか寂しそうな目はどこかで見たことがあった。

「姫様を守れ！」

ようやく脳が覚醒すると、犬たちが跳びながら、大量の火の粉を飛ばしていた。龍は水の中に逃げながらも、巨大すぎる肉体は火の粉を全て避けきれなかった。痛みに鳴きながら、それでも龍は、結から目を反らさなかった。

「やめっ」

ふと龍を傷つけられるのをなぜか阻止しなければいけない気がして、叫ぼうとするが、声が出せなかった。龍をかばって、一体どうするつもりなんだろう。

結が迷っていると、今度は大量の弓矢が飛んできた。犬神が、姫に当たらないように、と叫んでいるが、目標が大きすぎるためそれは難しいことではなかった。ついには血まで吹き出してきた龍は、水の中に逃げながら、それでもやはり、全て避けられないようだった。

ふと、結は、ずっと感じていた違和感にようやく気づいた。自分

が知っている龍と徹底的に違うもの。

「…あなた、もしかして、飛べないの？」

すると龍の目元から大量に水しぶきが溢れた。それが湖の水ではなく、涙だとなぜか絶対の自信があった。どうしてこの龍と始めて会った気がしないんだろう。

- 俺は違う！俺は妹を殺された！世界に裏切られた！

そうだ、五要と似ているんだ。五要の目と、涙と、似ているんだ。もしかして、予感に結の背筋が凍りそうになった。しかし聞かないわけにはいけなかった。

ふと導かれるように、丘の上を見つめた。するとそこは、処刑場に見えた。きっとあそこで神様は殺されてしまったんだ。もう、聞かない理由はなかった。

「そこに…いるんですか？」

龍は、答えない。

「五要様の妹さんの…神様」

ただ、龍は泣いていた。

「なんだって？」

結の声が聞こえた五要が、信じられない、と言った様子で龍の背中を見た。当然顔も見えない。しかし、都合のいい幻覚かもしれないが、その背中が、一瞬妹に見えた気がした。

「…聞いたことがある」

犬神が現れたが、五要は去ることもなく、じつと彼の話を見た。

「強い魂は、完全に消えることはなく、水や大地に溶け込むことがあると」

「強い…冗談じゃない！あいつはただの女の子だったんだ、なに、神とか、天才とか勝手に盛り上がりやがって…！」

泣き出した五要の肩を、犬神がそつと叩いた。そして彼は静かに焦っていた。先ほどまでは龍を焼き払ってでも結を助ける気でいたが、今はそんな考えは消えてしまった。五要の前で、そして恐らく気づいているだろう結の前で、焼き払うことなどどうしてくれる。

「私も甘いな」

そういつて自嘲して、そして、五要にも気づかないくらい小さな声で、犬神は胸元の傷に向かって小さくすまん、と呟いた。

「攻撃を止めて下さい！私なら大丈夫」

「やめなさい。」

声が耳の奥から聞こえてきた。優しい少女の声だった。神様の声だとすぐに分かった。

「ごめんなさい。あなたを呼んだのは、私です。」

「…え？」

「世界を狂わせれば、私も眠れるかと思ったのです。けど結果、あなたが迷い込む、それだけで終わってしまった。私はただ、自分が眠りたかっただけなのに、あなたを巻き込んでしまった。」

「…そんな、どうして」

「私がいたら、また、戦争が起こってしまうから。」

涙が、我慢できなかった。

到着するなり騒ぎに駆けつけ、高台に上がり、九郎は声が出なかった。信じられない光景だった。龍が湖に浮かび、そしてその前で結が浮かされている。無傷のようだが、泣いていることでもう十分

だった。

「結！」

どうしてお前が一人で泣いているんだ、声を張り上げると、結が顔を上げた。

「九郎様！」

思わず結が両手を伸ばすと、彼は吸い込まれるように呼び寄せられ、そして彼女を抱きしめることができた。

そしてそのまま剣を抜こうとすると、結がその手を止めた。

「止めて下さい…龍の中に、神様の魂がいらっしやるんです」

「…っ、何言ってるんだ、そんなわけ…」

・九郎様。

少女の声に、驚きすぎた九郎の顔は、少し緩んでしまったくらいだった。

「冗談だろう…」

しかし龍の目をいくらか見据え、九郎はようやく納得したように、剣を鞘に収めた。

「いつかは…すまないことをした」

すると、龍が首を大きく横に振った。もう彼女の魂と同化してしまっているようだった。

「重ね重ねすまないが…俺は、この子が好きだ。恋とかよく分からないけど、彼女より大事な子が現れるなんて、想像が出来ない」突然の告白に結は驚きが隠せなかった。そして、頬が恥ずかしくなるくらい熱くなっているのが分かった。

ふと大きな音に振り返ると、また弓矢が飛んできていた。結が叫ぶより早く、九郎が全て剣で落としてくれた。

「止める！！」

彼の威厳のある怒声に弓矢は静まり、あれだけ威勢良く火の粉を飛ばしていた犬たちも大人しくなった。

「遅いぞ、たわけ！」

目に涙を浮かべた一己に睨まれ、九郎は詫びもせず、もう笑うしかなかった。本当に、遅すぎたから。助けにくることも、気持ちを伝えることも、何もかも。

「おい、五要のボケンだら！」

「ぼっ」

罵倒に少なからず怒ったが、それでも素直に呼ばれるまま、五要が顔を出した。

「どうせ龍を呼び出しのは、お前だろう！ さっさと封印しちまえ！」

「あ…ああ！ 任せてく」

一瞬だった。遠くから飛んできた大砲に、龍の首が一閃された。

流れ落ちるように龍が倒れ、そして、九郎と結も巻き込まれた。血まみれになって動かない龍から逃れられるわけもなく、二人はゆっくりと湖に沈んでいった。

目を覚ますと、岸边に打ち上げられていた。ずいぶん流されたのだろう、祭会場が遠い。立ち上がって九郎を探すと、彼は倒れていた。青ざめて動かない彼に、す、っと体温が下がっていくのが分かった。彼の頭上で飛んでいる青い光から、しずくが落ちていた。それは少女の声をしていて、ずっと泣きながら謝っていた。

「泣かないで…」

泣かないで。この状況を現実だと思いたくないから。

自分でも驚くほど冷静だった。ゆっくりと両膝から崩れ落ち、そして九郎の脈を確認した。そして、もう戻ってこない彼の顔をじっと眺めた。涙も、悲しむ言葉も出なかった。

「…いき、返らせないんですか？」

そして。

「神様なんでしょう!？」

自分で驚くほどの酷いことを言ってしまったと後悔した瞬間、涙が溢れ出し、そして叫んだ。涙は止まらなかった。しばらくそうしている、青い光がゆつくりと飛んできた。

「一つだけ方法があります」

「何ですか？」

「犠牲を払えば…魂を救えます」

「…それは」

つまり自分が死ねば九郎が助かるのか、単純明快だった。だがそれは、できないことだった。そんなことは絶対にしてはならないことだと、さっき五要に説明したばかりだった。

「この世界での魂を消しましょう。そして、向こうの魂へと還りましょう」

「え？」

「さあ、すぐに還らなければ。本当に九郎様が天国へ行ってしまうですよ」

そうか、そういうことか。そういうことにしてくれたのか。泣きながら笑った結は、覚悟を決めて立ち上がった。

「お礼は言いませんよ」

「分かっています。恋敵ですからね」

そう言つて青い魂が光ると、結の足元がまるで砂になったように、どんどんつま先から消えていった。下から消えていくものだから、声はいつまでも耳に届いた。一己や、犬神の声も聞こえる。きっと五要も来てくれているのだろう。

何も言わずに帰ること、きっと怒られるだろうなと感じた。けど申し訳ないが、もう、その怒りさえ幸せすぎて、笑顔にしかならなかった。

胸元まで消えていくと、ぴくり、と九郎の腕が動いた。こんなに安堵したことはなかった。



そつと顔に近づくと、顔がどんどん消えてしまった手前、唇が鼻にしか届かなかった。生意気にも、彼の唇まで届かなかったことを、残念に思ってしまった。

まばたきをすると、現実に戻っていた。時間は自分がプールに行った翌日になっていて、友達も、もちろん父親も、世界も何もかも自分がいた世界と相違なかった。全てが夢だったのではないかと疑いもしたが、胸元の水晶が違うのだと教えてくれていた。

毎晩水晶を握りながら、九郎たちのことを考えていた。そして、会いたいと水晶に吹き込まないようにするのに必死だった。自分が戻れば、九郎の魂がまた消えてしまつかもしれないから。

今日も相変わらず暑い、向こうは今日も寒いんだろうな、なんて最近笑えるようにはなってきた。でもきつとまた、どこかでみんなに会えたら、何より彼に会えたら、きつとまた泣くのだろう。

「じゃあパパ、いつてきます」

「ああ、いつてらっしゃい」

「わん！わんわんわん！」

ほら。泣いた。

「…っ、九郎様！」

「げ、ばれたか！犬のふりしてようと思ったのに！」

「分かりますよ…何万匹いたって」

そしてきつと言っから。あの日の返事を。

「九郎様」

世界を超えて、何度でも、何度でも。

f i n

## はじまりは銀世界・12（後書き）

最後はやたら長くなってしまいました。もう切るところがなかった。

お疲れ様でした。そして読んで下って本当にありがとうございました。

また何かしら書くかもしれませんが、そのときはまた笑って、読んで下されば光栄です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0965n/>

---

飛べない神様

2010年10月11日16時04分発行